

流石の黒田も今更に舌を巻きぬ、
 謀反隠居とは全く彼奴のこと、世に對する出處進退のみか、常には殆ど度外に措きて
 冷笑する詩歌俳句にさへ斯くまでの用意修業ありと、始めて驚きながら猶も其奥を見
 れば、また別に『一家言』と題せるものあり、たゞ書き流せしまゝ諸處を塗抹して猶
 いまだ自己の意に満たざるが如きも、なるほど一家の言をなして此家に三年籠居の主
 意を盡せり、

一家言

○人は黄金を拜して積まんと欲し、我は黄金を卑しんで集めんと欲す、尊きがため
 に拜して積むものと、卑しきがために唾して集むるものと、いづれか其要を得た
 る、拜するものは足るを知らずして竟に其奴隷となるの恐れあり、卑しむ我は卑

しき黄金のために人生行路の恥辱を蒙らざらんとするのみ、

○書は讀むべし耽るべからず、食は身を養ふべし胃は飽くべからず、敵は避くべし
 遁ぐべからず、友は力めて愛すべし必ず頼るべからず、人は敬すべし信すべから
 ず、情は致すべし迎ふべからず、衣は着るべし飾るべからず、家は住むべし誇る
 べからず、言は用ふべし設くべからず、死は恐るべし悲しむべからず、心は常に
 平かなるべし時に傾くべからず、利は取るべし追ふべからず、事は明かにすべし
 争ふべからず、

○十年の苦學、六年の社會、三年の修業、なほ餘すところの三年を以て更に社會に
 試み、年四十にして始めて我みづから我を知らんとす、

○三年籠居の間、有形的に社會と斷ち無形的に社會と接す、現實に利害得失の數を
 脱却し意志に窮達消長の機を研究す、また身體の健康を以て天の賜物とし有用の

讀書を以て人爲の幸福とす、慰撫は健康より得て快樂は讀書より得、書を讀んで後は力めて運動し、運動して後に飽くまで勞れ、勞れて後に能く睡る、睡る時は死せるが如くなるべし、半夜半睡の妄想を以て其日に於ける我薄志弱行の罪とす、

なほ此他に三年籠居の我みづから我を警めて一家の言をなせるものより日々の米鹽に關するまで、凡そ二十五の條目を設けし用意周到、さすがの黒田も今更ら感に堪へて我を忘れつゝ讀み行きしが、そのまゝの白紙數葉を隔てし最後の紙末、別に一個の文ありて『某女に與ふ』と題しぬ、

いづれも書き流しの草稿ながら、いたづらに無用の文を作る閑人ならねば、苟も倉橋幸藏として某女に與ふの一文は殆ど生涯の珍事、さては彼嬢にかと思はず眼を敬て、讀み下せば、文よりも意を専らとし意よりも情を専らとして其間に自己の品格と所信

とを失はざるところ、むしろ風流罪科の文士が意中の人に對うて情緒纏綿の艶語を弄するよりも巧みに細かに華實を並び得たる體、いはゞ浮世破りともいふべき黒田健次も十餘年來交友の腸を扶られて、いよく其案外に驚きぬ、

某女に與ふ

某女に與ふとは、實際その女に與へしものならず、興ふるところは我おもふところにして、形なき此一片の文は形なき我心の言語なり、時に取りての所信なり觀念の一部なり、記し置きて他日懷舊の一に備ふるのみ、あなかしこ、

この文や人に知らるゝ勿れ、たとひ反故となりて屑屋の籠に投ぜらるゝとも、引き出されて世に現るゝ勿れ、また夢にも某女が深窓に入りて夜半の枕頭に通ふ勿れ、

もとより仔細らしき仔細ありての業にもあらず、別に事々しき心ありての境涯にもあらず、また風流を解して閑日月を娛しむ今の身にもあらず、たゞ同じ途を行くに、短き脚は長き脚よりも忙しかるべき我、生れて智に疎く才に乏しき我は人よりも深く學びて多く力むべきの理由ありて、かく遺憾なき世に反しし讀書の窓を此頃の朝夕に訪るゝものは、軒端を渡る木枯と庭前の枯草に絶えなくなる蟲の音とのみ思ひしに、思ひきや玉の臺に養はれて隙間も風さへ厭ふべき君が姿の屢こゝに訪ひ給はんとは、元來の野生に育ちて溫柔の肌なき我形は動かざれど、多年の貧苦に處して嬋娟の習なき我心の俄に驚かざるゝを奈何せん、馴れぬ道芝の露にや濡れ給はん霜にや犯され給はんかと、

されば三年こゝに閉ぢたる我柴折戸は鐵の扉ならねど、惡魔の力にさへ容易くは破られまじき今の我覺悟として、音もなく吹き送る君が情の匂ひを防ぎ得ざるは

何の爲ぞ、もしこれを戀といはゞ三年こゝに戀や來る勿れ、

今の我は形の平かなるよりも境の靜かなるを願ひ境の靜なるよりも心の穩かなるを願うて、たゞ一意、斯の如きの一書生、かの綽々たる餘裕あるべき丈夫兒ならねば、かくまで脆く弱く感じ易き我心を憫れみて三年讀書の我愚を守らせ給ふは却つて君が情といふべし、

戀は神聖にして人の生命といへど、今の我は其戀の來るを恐る、戀は生命の露にして人の誠實といへど、今の我は其戀の來るを厭ふ、恐るゝは避くるの意にあらず只これを迎ふべき境涯にあらざるを奈何せん、厭ふは忌むの心にあらずして只これを遂ぐるの途なきを奈何せん、年齢三十五にして妻なきの我、なほこゝに戀を恐れ戀を厭うて世間萬人の羨むべき君の情に反かんとするものは何の爲ぞ、願はくは我をして三年無情の人たらしめよ、三年無言の人たらしめよ、

三年にして門を出づるの日、もしなほ君が心に我を思ふ一點に餘蘊あらしめば、
 我この戀を荷ひつゝ却つて君を襲ふやも知るべからず、もし君が心に我を忘れて
 一縷の情緒なからしめば我この戀を荷ひつゝ却つて君を恨むやも知るべからず、
 されど君は三年この戀に弄ばれて三年の色香を失ふ勿れ、夢にも我ために三年の
 他日を待ちて三年の春秋を空しうする勿れ、戀を遂げざる間は其戀のいづれに行
 くも清く、戀を果さざる間は其戀の何人に落つるも潔し、たゞ君がために其戀の
 清く潔きのみを思つて三年の後に我戀の影なき遺憾を思はざるなり、乞ふ君この
 我をもて徒らに無情の人となす勿れ、たゞ三年こゝに無情の人たらしめよ、
 我みづから甘んぜざる今の身として君の情を迎ふれば、只これ君が情の露を一時
 の快に取るもの、却つて長く君が情に反くの我たらん、もし三年の後この門を出
 でて君が情を迎ふれば、たとひ綠葉蔭をなして子は枝に滿つるの恨ありとも、正

に君が清き情の露に生涯を伴はんとせし我泣いて君の幸福を喜ばん、羨んで君の
 舊情を謝せん、あゝ戀や君を導いて他に嫁くの早きか我を誘つて君を追ふの早き
 か、さもあらばあれ、戀や君をして一時も無情の人たらしむる勿れ、たゞ我をして
 三年こゝに無情の人たらしめよ、

夜更け人定まりて時雨の音か木枯の音か頻りに我書窓を叩くの時、また燈火
 の影に何物か來りて我を窺ふが如く襲ふが如く思はるゝの時、世に反き人と
 断ちて茲に三年籠居の無情漢しるす、

たとひ聖賢の書にても漫然讀過の黒田健次が何とか思ひけん、目を敬つゝ幾度も讀
 み返して後、月夜ならぬ白晝に自己が鍋釜を引き抜かれたる心地しながら、うそが事
 するとは眞實の世諺、無口者の油斷大敵とは此事、あの隠居め、女が運ぶ情の露も膝

上にこぼるゝ味噌汁の露も同じ男と思ひの外、さてくゝ面にも氣にも似合はぬ味な心
 を持った奴かな、しかも只この草稿に止めたるのみにて夢にも某女の枕頭に通ふ勿れ
 とは、いよく心憎き文句、戀に慌て、初心めいたる野暮でない證據、されど與ふる
 ところは我思ふところとして、いつまで此まゝの人知れぬ草稿に葬り得べきか但しは
 彼嬢が襲ひ來る色香の深淺に依つて此草稿を書き直しつゝ送るの時あるか、こゝ暫時
 の後が土儀際の劍が峰、あの倉橋が戀の剛敵と組んでの勝負こそ面白けれ、理窟と實
 地の間一髪は一入、見物ぞと、満面の笑を含みながら猶その奥を見れば、また一枚の
 白紙を隔て、『黒田健次』と題する一文あり、さア事ぢや、そもくゝ乃公を何とか見
 る、彼奴が平生の我に對する口と心が一致するやせざるや、この一文の取捨に依つて
 は我また進退を決すべきの時節到來、十餘年の交友とはいへ萬事の耳目口舌、むツつ
 りとして押せば鳴り叩けば響くべき急所の分らぬ男、いづれ益友とも師傅に等しき朋

輩とも吐すまいが、また其間に多少の我本領を知るところあらんかと、道踏み迷うて
 飼主なき病犬に脚下を嗅がらるゝ心地しながら、薄氣味わるく讀み下せば、

黒田健次

過去に於ける黒田健次は知らず、將來に於ける黒田健次は知らず、唯こゝ
 に我籠居の一飯を預ちて養へる黒田健次その人の現在に於ける性行を見る
 のみ、世俗これを單に食客的といへど、我なほこれに多少の禮を失はずし

て十餘年來の親友とし、たのむ木下に雨を霽るゝを待つものとする

大喝一聲、眼を怒らし身を躍らしつゝ、長刀を振うて勢ひ猛に斫り下すも、その刀
 痕の長く曳けるのみにて深く致命の傷をなさざるものあり、また柔佞喃々、猫の
 馴るゝが如く親しみつゝ、竊に細き針を以て肺肝を刺すものは、その残忍深酷なる

瘡口は小にして出血少く耳目を驚かさざれど竟に殺し了りて再び起つ能はざらしむ、もし黒田健次に罪を犯す事ありとせば其いづれに屬すべきか、我は斷じていふ、刀を以て長く斫るの人にして針を以て深く刺すの人にあらざるべしと、彼は咎むべし憎むべからず、彼は吐すべし退くべからず、彼は厭ふべし忌むべからず、彼は愛すべし親しむべからず、憎めば反し、退くれば襲ひ、忌めば仇し、親しめば弄せんとす、とかく言を設けていへば頗る難物にして始末に終へぬ厄介ものなり、もし強ひて譽むれば安價時計の器械に似たる男なり、手を觸るれば忽ち狂うて止む、

その頭腦散漫にして行爲の不節調なるところ自然に無頓着となり鐵面皮となりて、時に常識を失ひ禮義を棄り、しかも多年の貧苦と失敗とは愈々その資性の大膽を増して前後の無差別なるところ自然に物を輕んじ事を輕んじ人を輕んずるが如

きも、いまだ謀りて他を谿谷の底に陥れつゝ岸上より冷罵するの惡魔にあらず、否寧ろ人を陥れんとすれば自己また俱に墜落するの不用意にして無意識なる滑稽を演ずべし、彼の罪は意思と行爲と結果とに構成せられたる重罪にあらず輕罪にあらずして時と場合に生ずべき違警罪の最も大なるものなり、されどまた一度その輕罪を犯して終身を悔悟するものにあらずして、日々夜々その違警罪を犯して更に改悛の狀なきに至つては頗る手數の面倒なる男といふべし、

たゞ恐る、法理に於ける時効よりも眼前の事すら忘れ易き性を備へたる世人が、數年獄裡に投ぜられし前科犯を知らずして却つて朝夕その警察署に曳かるゝを知るがため、彼は彼を知るものゝ前に罪淺けれど、彼を知らざるものゝ前に罪深き男たらん事を、

その才幹は學識の數倍にして其學識は其性行の十分一にも價する能はず、もし彼

に一點の用意と節調あらしめば、正に當世俊秀の人物たるべきも、惜しいかな彼は野原の風の如く首尾なくして音高く吹き荒み、谷間の水の如く秩序なくして騒がしく亂れ流る、

罵言と嘲弄と冷笑とは彼に於て平常の言語なり、横着と駄辯と悪戯とは彼に於て平常の行爲なり、懶怠と散漫と無禮とは彼に於て元來の資性なり、されど彼は善惡ともに應報の來るを驚くものにあらずして、その言語と行爲と資性とに依つて得たる世の嫌疑怨恨は彼また甘んじて受くるの大膽を有す、否、有するのみならず時に或は自ら迎へて快とするの奇癖あり、かくの奇癖たゞ其人の奇癖に限られて他に及ぼさざれば事なけれど、もしこれを大にすれば、天下この流の厄介物を持て餘して常に社會の秩序を紛亂す、もし彼をして戰國か舊幕の時代にあらしめば必ず世に拗ねたる深編笠の浪人として、今の講談か浪花節の一端に唄はるべき

ものなるべし、

されど耳目の小面憎くして舌端に毒を含めるところ寧ろ其才幹の送り出づるを見る、をりく別人の如く自己が性を枉けて沈思黙考するところ多少その本領を窺ふに足る、彼が才幹とは何ぞ、彼みづから事を設け身を苦しめて加之も其事に驚かず其苦と戦ふの勇氣をいふなり、彼が本領とは何ぞ、いやしくも五體のうちに一縷の命脈あるかぎり丸裸として鬼畜の間に投ずるも彼また能く這ひ脱れて死せざるの技倆をいふなり、
彼は檻に捕はれたる猛獸の如く、餌に飽けば益々荒れ、飽かざれば愈々吼ゆ、その厄介物たる所以なり、彼は粗大なる南瓜の如く、危けれど蔓にあれば落ちず、落つれば美味ならねど膳に上る、まんざら捨てたものにもあらざる所以なり、これを憎まむ乎、これを愛せむ乎、あまり憎まば憎むもの、爲ならずして憎まる

る彼がためにもならず、あまり愛すれば愛するもの、爲ならずして愛せらる、彼がためにもならず、あゝ厄介物々々々、この厄介なる無用のお荷物を奈何せん、追はんか追ひ出さるべき奴ならず、引き止めんか止るべき奴ならず、あゝ難物難物、この無用の難物を奈何せん、何物か我心に答へていふ、彼は彼が知られざる世人の前に一日も多く嫌はれ深く怨まるゝより、彼は彼が知らるゝ汝の前に一日も多く救はれ深く迎へらるゝの幸福なるに如かずと、是に於て三年籠居の我米鹽を此厄介物に預つべきの意を決せり、もし其間に此南瓜野郎みづから蔓を辭して去らば去らんのみ、

腕力に訴ふの外これを退くべき手段なくして、我惜寸の讀書を彼が喋々たる饒舌に攪亂せらるゝこと凡そ二間時餘の後、あきれて筆をとる、

さすがの黒田健次も一讀再讀、さらに三讀の後、ぐる／＼と眼球を廻轉して自己が額を軽く叩きながら、やア畜生々々、痛いところを押へ居ッたぞ、そも／＼我を評するに苟も善美を標準とせずして萬事を惡罪の點より割り出したる論鋒、それもよし、もしこれを大にして舊幕時代に置かば講釋師の飲喰ひ種となつて張扇子に叩かるゝか浪花節に唄はるべき男とは、畜生々々、あの隠居め、やう／＼譽めたところで野生の南瓜に比し、まんざら捨てたものにもあらざる所以とは、なさけないかな、されど最後の一節、何物か我心に應へていふところは正に友を思うて念々さらに忘れざる一擲の涙あり、この厄介なる無用の難物と連呼するは寧ろ飽くまで我を捨てざるの眞意、たとひ赤裸にして鬼畜の間に投ずるも死せざるの技倆を知るは我本領を疑はざるの言、あきれて筆を探るとは手も付けられざる言語道斷の奴と叫ぶに似たれど、その呆れて手も付けられざる言語道斷の奴に三年籠居の米鹽を預つべきの意を決せりとは嬉しい

かな、なか／＼この南瓜野郎は急に君の蔓を辭して去らざるべしと自己また意を決しぬ、

其四

日和下駄からころと踏み鳴らし竹の皮の焼飯に腹を肥しつゝ、上野の圖書館より大學講師の博士が許を訪うて、終日の脳裡に寸隙なく流石に勞れたる身も、歸れば浮世を隔てし山家に似たる落葉寂寞の境、また今更の心地して倉橋幸藏おもはず笑を含みながら、眼前巨萬の利を掴み損ねて眉を顰めつゝ、金殿玉樓に歸る俗物が知らざるところ、彼は今夜の金屏風に圍まれ絹夜具に包まれて夢おどろき易く、我は今夜の窻うつ木枯に誘はれ木綿夜具に包まれて安く眠る、

をりしも其日の暮近く夕飯の膳に對うて箸とりながら、前に坐せる黒田を額越しに覗

んで婆を見返りつゝ、

「婆や今日は一日、乃公が居なかつたから嘸や嘸、迷惑したらうね、鼻息が荒くツて」
 「いえ貴方、今日は大變、おとなしくツて眞面目に在らツしやいましたよ、午後は猶更、しきりに御本ばかり讀んで在らしツたやうに見受けましたから、ほゝゝゝゝ」
 「む、乃公の不在に眞面目で本を讀んで居た、そいつア近來の珍事だ、殆ど其人にあるべからざるこツたね、はゝゝゝゝゝゝとところで黒田、もう何とか屈理窟の一言ぐらゐる出さうなもんだな」

「いや、僕は聊か仔細あツて今日一日は無言の行だ、それに少々、先刻から腹が痛くツてね、飯も平生のやうに喰へないよ」
 「いよく珍事出来、君が無言の行とは實に奇中の奇だ、たまたま本なんぞ讀むから腹が痛むのさ、しかし眞實の腹痛なら用心センと不可ンが、喰へないといふ飯が君

るが如き聲しぬ、

さては全くの腹痛、しかも上の部に達せしかと耳を欬つれば、その呻る聲の次第に長く高く高くなりゆきぬ、

あれほどの横着漢も失敗の餘り今は我ために衣食する身を思へばこそ、無遠慮のうちにも何となく遠慮の氣味ありて、かくまでの腹痛を醫藥に及ばぬ中の部と戯れし心のうち、どこやらに物の哀れを含みて嘔や淋しく、過ぎし妻をも斯る時こそ一人さらに戀しかるらん、たゞの男が悲鳴よりも却つて無慙なれ、せめては届くだけの介抱して取らせんと、おもはず坐を起てば、呻りし聲の次第に絶ゆると等しく、俄に小田の蛙を踏み潰せしが如き大聲を發して叫び出しぬ、

「御入來なる上様方へ、申し上げます表題の儀は、花も心も開けゆく世の男一疋、明治年間に黒田健次とて、外貌の割には氣の善い豪傑、いざやこれより其一代記をばし

唄ふは正しく浪花節なりける、

さすがの倉橋幸藏、あつと呆れて其まゝ机の前に身を抛ぐるが如く居直りながら、いやはや論にも齒にもかゝらぬ狂氣め、これが三十の上を越して苟も文字あるもの、仕業かと、腹が立つやら呵しいやら、半ば怒り半ば笑うて猶も耳を欬つれば、ばちくと指もて木枕の横を叩く音もろとも、

「さて演じまするは、例の黒田健次殿一代記のうち、昨夜の讀み續き、いよく浮世の戦場を逃れて落武者と相成つたる悲しさは、心にもない根岸の奥の去るところに食客的となられまして、かほどの豪傑も時と場合には致方の御坐いませんものか、あはれ御姿と窶々しく、過ぎし昔を夢と御覽遊ばされ」

これはまた取も直さず張扇子の講釋師なりける、
十餘年來の校友、もとより調子の狂ひし奴とは知りながら、かほどまでの奴とは今の

今まで、もはや棄て置くべき場合にあらずと思ひしが、ふと心に浮びしは我草稿の一文、あのまゝ彼奴を大にしたところが浪花節か講釋師の張扇子に叩かるべき男と論ぜしを、今日の不在中に引き摺り出して見たるがための面當か、さては某女に與ふ一文をも讀みしに相違なし、南無三寶、たゞざへ事を持ち上げて喜ぶほどの厄介者、無用の騒ぎを面白がって益々調子の狂ひ出す此いたづらものに、あの草稿を見られたるは不覺の上の不覺ぞと、まだ靜に坐を起ちつゝ、寔音を忍ばせし障子の隙間より差覗けば、どこが頭やら足やら分らざりし龜の子が蒲團の上に取り直つて、小首を領け耳を欬つゝ、壁を隔てし我舉動を窺ふ體、空家に取殘されたる狎の如し、

「こら黒田、貴様、怪しからん奴だぞ、不在中に僕の草稿を引き摺り出して見たな、殆ど人の祕密を發いて信書を破ると一般の罪、ましてあの呻り聲は何だ、宜い年を仕ツたものが今にも咽喉を絞め殺されさうな馬鹿聲で、第一どこに腹が痛いんだ」

「は、は、は、失敬々々、しかし腹痛は全くの虚偽でないよ、少しは其形跡のあつたこととで」

「いや、君のいふことは一切虚偽だ、たとひ虚偽でないにしろ僕は斷じて虚偽にするから將來その決心で居るが宜い、いくら何でも飯が喰へないで世の中に彷徨く奴は無効だ、食客的め、あまり悪戯をすると叩き出すぞ、いつまで蔓に付けて置かないぞ南瓜め」

「や、君にして聊か其言の人品に關するを恐る」

「餘計な恐れだ、黙ッて寝ろ」

「寝ろ、寝るがね君、僕が大成したところで講釋師と浪花節の一端に名を止むるのみは少々酷かつたね、もし強ひて響むれば安價時計の器械に似たる男なり、觸れば忽ち狂うて止むの一段、いよく手厳しかつたね、まんざら捨てたものでもない所以

るところがあるよ、をりく、酷に渡るの恐れありだ、ちと曲ッて立つ屏風に氣を付けてほしいね」

「は、は、は、其一を知ッて其二を知らない奴ほど度し難いものはない、イツそ何事も考へない素馬鹿の方が宜い、もし曲ッて立つ屏風を曲折の理に訴へるなら君、まだ適切にして其言よりも面白い實例がある、あの蜂は倒さまに家を作ッて棲んでるよ、は、は、は、某女に與ふの一文は所謂る歌人の戀歌を詠すると一般、そもく、何の不思議かある、當分まづ餘計な人の事で氣を揉まずに自分が顛ばない脚下の用心專一だ、靜に寢て能く考へろ、白癡の圖に乗ッて其上うかく、這ひ出すと今夜こそ、きかないぞ、ろくでもない胴間聲を發して二度と再び浪花節を唄ッて見ろ、頭上から冷水をぶツかけてやるから、のほせ上ッた狂氣の治るやうに」

いひつゝ、登音あらく立去りしが、臺所より手桶の水を提け來りて隔の闕際に置きながら、また机に對うて讀書の體を、ちらと見て流石の饒舌家も其まゝの無言、たゞ口中にて何をか呟く時、飯炊の婆が聲として、

「あの旦那様、この手桶を一個で宜しう御坐いますか、もし足りませねば、また別なものに汲み込んで置きますから、ほ、ほ、ほ」

「は、は、は、は、よく氣が付いたね、なか／＼婆やも脱落がない、こゝらが平生の復仇だからなア、しかし其手桶一個で宜からう、あんまり浴せ過ぎて凍え死でもすると死骸が面倒だから」

「いえ貴方、宜い加減に冷え切ッたところで、鐵瓶の湯を注して温湯になつたのを一浴び、おかけなさいますと、また直に蘇生りますから大丈夫で御坐いますよ、ほ、ほ、ほ、黒田さん御免遊ばせよ、悪く思ッて申し上げるんでは御坐いません、眞實お爲を存じて心配いたしますので一

次、まだ朦朧として睡たけの眼に不平の顔色、しぶくしながら端書を取り上げて、香爐獅子に似たる鼻息ふんと笑ひぬ、

「學問は居家處世の方便に供すべきものだ、さるを御苦勞千萬にも可憐ら生涯を只これ文字の犠牲に奉るの徒、いたづらに道踏み迷うて屁理窟を放り合ふの輩、其奴等が殊勝氣に寄り集つて折角の場所へ、わざく僕が出掛けて一棒を喰はすにも及ぶまい、しかし悪い事ぢやアないから君は行くが宜い、まづ僕ア差控へよう、人を驚かすは士君子の爲さざるところだ」

「は、は、は、いや御道理な理由だ、あんまり君のやうな士君子が差出る場席でないからねエ、ぢやア不安心ながら、また留守番を頼まう、しかし例の書齋荒しは眞平だぜ、鼠さへ君、常に餌を呉れてやれば悪戯をしないと云ふに、まして人間の食客的」

「置いて合はず居て合はずの一諺、どうせ睦じい新夫婦のやうに行く理由が無いか

ら、さう君いちく小言をいふない、置くほどの奴は置かれるやうな奴より辛抱が強くツて度量が廣くなくツちやア治らない理窟だもの、まして主客の勢ひ既に異なれりだ、さるを君、なほ解せずして強ひて僕を追ひ出さうとするなら遠慮なく追ひ出し給へ、僕また別に心算ありさ、所謂某女なるものに事情を打明して食客の鞍替をするから、は、は、は、たゞ單に讀んで字の如き米鹽を頒たるのみで事々物物うるさい小言を聞くより、苟も大臣の令嬢に養はれて戀の幃幄に參じつ、君を攻め立つるの快なるに如かずだ、おい色男、どうだ」

「ば、馬鹿」

倉橋が立出でてより凡そ一時間ばかりの後、誰やら立關へ訪ひ來りしを臺所の婆が迎へて何をかいふ體、をりしも黒田は只一人の無聊に堪へ兼ねたるま、そつと差覗け

ば此冬枯の寂寥たる破れ廂の下に色香も深き花一輪、かの令嬢綾子が小腰を屈めつ、微笑を含みぬ、

しかも婆は主の意を心得顔に氣の毒けの額を寄せつ、生憎主人は不在で御坐います、また歸宅のほどは夜に入ります筈とて、あはれ此ま、敬して遠ざけ言葉巧みに追ひ歸さんとする體、黒田みるより眼を圓くして其場に立現れつ、慇懃に會釋しながら、

「やア、これは入らッしやいまし、おい婆さん、折角お越しになつたものを、倉橋が居らないからッて乃公が居るぢやアないか、さア貴嬢どうか此方へ、番茶でも召上ッて暫時、そのうち歸ッて來ませうから」

「だッて黒田さん、今朝お出掛けに今日は夕方になると仰しやいましたよ、あまりお待ち申し上げては却ッて失禮かと存じまして」

「なアに乃公には午前中に歸ると言ッたよ、よし夕方になるとしたところが、まアお

通し申して、お茶でも上げないぢやア、どうか貴嬢、おい婆さん早く臺所へ往ッて湯でも沸かせよ、其間この乃公が御相手するから、さア貴嬢、ちよッ今日に限ッて倉橋め、また、のこ〜何處へ出たんだらう」

浮世に馴れて育ちし蓮葉ならねど、去歳の十九までは當世流の學校育ち、しかも大臣の令嬢として二十歳の今は交際場裡の花と持て囃されつ、この夜會かしこの園遊會にも招かるゝ身なれば、面映ゆけに袖屏風の古風なる體も無く、女大學さては今川流に縛られて立往生の風情もなく、まして麴町の金殿玉樓より根岸の奥深き此草叢に訪ひ來るほどの心には、黒田の言葉を渡りに舟と嬉しく、たとひ其人の姿なくとも運び通ふ我おもひの届けかし、結局その人の在さぬは情の露の置きどころ、歸りて後に残る色香や知り給はんと、しづかに會釋して其ま、打通りぬ、

何事をも例の横着心に弄ぶが如き黒田ながら、これのみは眞實その心に倉橋が行末

を思ひ、また綾子が人知れず忍ぶ情の胸裡をも察し、つまりは互の身のためと、幸ひ無事に苦しむ食客の一仕事、なほ何處やらに例の面白半分といふ氣はあれど、あれほどの我妻を苦勞の果に死なしたる心の申譯、せめては自己こゝに月下氷人となつて榮え行く此戀を本物に仕立上げんとの心底、まづは殊勝と獨り笑を含みぬ、倉橋が書齋を當坐の客室として、庭前に對へる縁端の障子を開け放ちつゝ、取散らしたる書籍を俄に押し付け、机の前に坐蒲團を裏返して慇懃に進めながら、少しく坐を下り更めて一禮せし體、いかにも平生の調子に變りて呵しく、もし知る人に見せしむれば思はず吹き出すべし、

「先達といひ今日といひ、遠路わざわざ折角の來臨に生憎、ちよいと前日に御一報下さいますれば宜しいに、倉橋が歸りましたら嘸、遺憾に存じませう、しかし午前中には十中の八九戻る筈で御坐いますから、まア貴嬢、ゆるく在らっしゃい、立派

な御住邸から時に田舎めいた茅屋の半日ぐらゐるは却つて御保養の一端になりますよ、はゝゝゝゝゝゝ」

「いえ先日、貴方の御目にかゝつて居りますから、倉橋さんが在らっしゃらなくとも、しかし、いつ伺つても宜しう御坐いますね御閑靜で、なるほど人が根岸と申します筈、麴町邊の騒がしいところと違つて、何だか氣が清々いたしますよ」

「さう御賞讃に預つては御挨拶に困りますが、閑靜は閑靜です、倉橋が今の境涯を守つて自己の所信を實行するには至極適當の場所です、否、適當といふより寧ろ已むを得ざる場所といふ方が當然かも知れませんがね、はゝゝゝゝ拙者も實は死に損つた大病の後で、まづ暫時は養生かたぐゝ」

「おや、さやうで御坐いますか、少しも御病氣後のやうには、お見受け申しませぬが、よほど大體が御壯健と見えますね」

「そりやア貴嬢、貴公子の病餘などと違つて、根が全くの野生で御坐いますもの、死ぬほど煩つて氣息奄々になつたところで、まづ面貌が紳士の感冒ぐらゐるですな、つまり蠻族の系統で獸身に近い方ですから」

「ほゝゝゝ、まさか貴方、いくら何でも、しかし、お身體の御壯健は王侯にも代へ難い幸福の第一と申しますから、何より御結構で御坐いますよ、あの倉橋さんも別段お弱くないやうに伺ひますが」

「はい、なか／＼彼も達者の方です、拙者と違つて頭腦が能く出來て居ますから自然その割に身體は拙者より劣りますがね、それでも世間普通の人間と比較上、頗る健全です、第一、彼が身を大切にして衛生の注意と鍛鍊の勇氣に至つては實に他人の企て及ばざるところで、まづ朝は鴉の聲と争うて日の出るか出ないうちに寢床を飛び出すや否、褻衣のまんまで、井戸端へ駈け出して丸裸の頭上から冷水を二三十は

い、それが濟むと戸を引き開け庭を掃き自分の書齋を拭き掃除して、冬でも額に汗が出るほど働かないと決して朝飯の箸を取りませぬ、また人に過ぎた勉強力で讀書を致しますが、その間また人に過ぎた熱心で力めて運動しますから、皮膚も筋肉も次第に固くなつて年々あの通り丈夫になります、物を容れるには器が大切といふ事は誰でも言ひますが、さて實行する點に至つては倉橋ほどの男まづ稀らしいです、これに限らず何事にも彼は言行一致、いはゆる實行的の男で、拙者などは十餘年來の交友、殆ど骨肉に勝るの間柄ですが、いまだ曾て一言の虚偽を構へた事も御坐いませんな、ところで世間もし彼に類する人ありとすれば、往々かゝる人の一失として度量狭小、頑固偏執、或は冷淡無情、甚だしきは殘忍酷薄、この複雑にして限りなき變化の人生萬事を單純なる數學的の答案に比せんとする人物が多いやうですが、さて倉橋は妙ですよ、自己を戒むること頗る嚴格で在ながら、人を待つこと

頗る寛で、むツつりとした無口者ですが、なか／＼情の深い觀察の行き届いた案外の捌けもんですよ、あんな眞面目な顔をして、不意に人を驚かすの滑稽と洒落を持つてるから猶更の不思議ですよ、は、は、は、おや、つまらない饞舌で夢中になつてまだお茶も差上げませんでしたな、まことに失禮、只今すぐ」

そのまゝ臺所へ走せ行けば、婆も心得て火鉢の火を掻き起し鐵瓶の湯を沸し番茶を炮じながら、

「黒田さん、いゝ加減に、お歸し申さないと却つて貴方」

「わかッてるよ、さう野暮に喧しく言ふない、意地の悪い、まして戀の水上に掉さした粹の果ぢやアないか、少しは自分の若い時を思つて察してやれ、倉橋だつて口でこそ四角張るが、心の中では婆さん、まさかね、どうで内證の裏表さ、盜賊を引き摺り込んで茶を呑ましたとも思ふまいよ、は、は、は、」

「ほ、ほ、ほ、自分の若い時に覚えがあればこそ、お歸し申す汐合が大事だといふんですよ、また盜賊は外から引き摺り込まなくつても黒田さん、家内に居るか知れませんぜ」

「畜生、ふざけるな婆の癖に、は、は、は、」

人も愛敬 番茶も出ばな、その炮じ加減を馳走ぶりに持ち出でて、殊更ら慇懃に獻ずるが如く差出しながら、

「お口には合ひますまいが、どうか召上つて下さい、お熱いところだけが取得です、は、は、は、かういふうちにも倉橋が歸れば宜しう御坐いますか」

「いゝえ貴方、自分が勝手に、いつも不意にお邪魔いたすので御坐いますから、萬事お構ひ遊ばしては却つて恐れ入ります」

「構ふにも構はないにも御覽の通り、これッきり、いは、哀れな境涯ですよ、まるで

火事場の焼け出されと一般で」

「どう致しまして、わざと今この御境涯、誰に貴方、出来ますもので御坐いますか、つねく父も、さやうに申して居ります、苦學艱難も其ま、引續いて遣れば出来るが中途で一旦身を立て、家をなした後また舊の苦學艱難に立戻るは、なみく尋常人の及ばないこつた、きけば三年といふが其三年の間に門を開いて再び世の中に出る時は見物だ、おもひやられると、陰ながら實に感心いして居ります、ですから妾が、かやうに伺ひますことも、父は、よく存じて、また妾も、いちく父に申した上で、まるるやうに致して居りますくらる」

「は、アなるほど、いや其邊の事も倉橋に申し聞かせう、定めし満足に感謝するこつて御坐いませう、なアに貴嬢、少しも御遠慮なさらないで、御氣分さへ向けば何日でも入らッしやい、また倉橋からも、をりノ伺ふやうに勸めて置きますから」

「どうか是非、お願い申します、かうして今は大切な御勉強最中で御寸暇というては御坐いますまいが、在官中は外の方よりも取分け、お心易う入らッしやったのですから相變らず、まア御運動かたぐ、貴方も御同伴に」

「ありがたう御坐います、お世話になる時だけ散々お世話になつて、今更ら急に御無沙汰するやうな男では無いんですが、むしろ其處に倉橋の倉橋たる所以、しかし、そんな事に關せず是非お伺ひ致すやうに申し聞かせう、ところで拙者も、ついて參つて御差支は御坐いませんですかね、此奴元來無作法千萬な厄介物で、をりく場所も辨へず禮を失する事が御坐いますから、前以て其邊の御海容を願つて置きます、萬事あの倉橋を御覽の眼からア殆ど貴嬢、お呆れなさいますよ、倉橋は常に拙者を評して、安價時計の器械だの麥藁細工の笛だの乃至また出來損ひの南瓜野郎など、は、は、は、は、」

「ほ、ほ、ほ、あの倉橋さんが、そんな事を仰しやいますか、よくよくまあお氣の合つた間柄で御坐いますねエ」

「なアに氣は殆ど反對で謹直と放逸、緻密と散漫、黽勉と懈怠、沈黙と饒舌、まるで黑白の性行ですが、どういふもんか互に何を言つても言はれても腹の立った事が御坐いません、世話せられても恩に着ずといふ淨瑠璃文句の戀中と一般、我ながら不思議です、つまり申さば腐れ縁ですな、この腐れ縁に繋がるもの我等二人の外に猶まだ三人御坐いますよ、以上五人が今より十年の昔、隅田川の邊り汐入村といふところで貴嬢、夏は藪蚊に責められ冬は布子一點寒曝し加之も喰ふものが無くツて年中の空腹を抱へながら苦學難行して來た連中ですから、實際その情に於ては骨肉よりも親しいです、就中この倉橋は其當時すでに一味の謹勉家を以て稱せられ、萬事に周到緻密、さらに失策の無い男ですから、先づ後見役といふ工合に控へて居りま

したな」

「御苦勞は御苦勞でも、さぞ御愉快で御坐いましたらうね、さういふ方々が五人も在らツしては」

「我黨あの當時を回顧して常に苦快と言ひます、喜憂こもくく苦樂相半すといふのが世間普通の語で、我々のは徹頭徹尾の苦これ快と無理に叫んで押し通した時代ですから、甚だしき時は貴嬢、五人のうちの二人が外へ出て後に残つた三人の大の男が一晝夜の斷食、二日目の朝、苦しまぎれに新聞紙を敷いて其上へ米櫃を倒まに伏せ手の痛いほど三人が底を叩いて得たるところ一合たらず六七勺、全く一握みの粉米です、それで貴嬢、ともかく三人が一晝夜の空腹を肥さうといふんですから堪りませんよ、中にも上田力といふ奴なア五尺八寸二十貫目の大兵で、少し控へ目に喰はしたところが一日に一升飯の難物が居るんです、しかしこの上田といふ奴が

我黨隨一の趣味を備へた男で、質朴剛毅のうちに自然の滑稽を含んだ鹽梅、なかなか奇男兒です、ところで此奇男兒が其六七勺の粉米を兩手に恭しく捧けて三升炊の釜の底に入れたといふより寧ろ一粒づ、並べたのですね、そして水を凡そ二升五六合、溢るゝばかり汲み込んで、時しも秋の末、落葉を掻き集めて来て、急かす慌てず悠悠々寛々、とろりくと二時間半ほども炊きましたね、さア皆来い、いよく飯が出来たといひますから、餓鬼の如く取巻いて釜の蓋を開けると貴嬢、たゞ見る一面の薄白い濁り湯で、いやしくも米の姿が見たくも皆無です、すると上田が杓子を取って宛ら白癡が川へ落した錢を拾ふが如く、おもむろに靜に小心翼翼々、そろつと掬ひ上げたのを見ると米粒が空豆ほどに膨れて今や將に溶解せんとする體です、どうせ溺れて死ねば膨れるもんだ正に是れ米の土左衛門、さア死骸を見届けた上は腹に葬れといふので、一掴みの鹽を打込んで喰った時、いや吸うた時には貴嬢、多

年の貧苦に馴れた流石の我々も聊か物の哀れを催しましたな、倉橋の如きは始終默然として眼中たゞ涙あるのみ、其時その倉橋の涙で菩薩心夜叉手といふ名に化して殆ど半月に亙る長篇の論文を朝夕新聞に寄せたのです、以來まづ暫時は彼が文筆の料に依つて、また米の土左衛門にも出喰はしませんでしたが、いやはや、思ひ出すと懷舊の情に堪へませんよ、はゝゝゝゝ」

「おや、まア何といふ事で御坐いませう、お談話を承ったばかりでも涙が、なるほど、さういふ御苦勞を遊ばした方は格別、人に過ぎて世間に飛び抜けて、お志節の堅固なは全く其理由で御坐いますねエ、しかし大變に、お邪魔を致しました、お歸りになりましたら、どうか宜しく、是非お遊びに来ていたゞくやう父の使者に妾が伺ひましたと、くれぐれも御傳言を願ひます」

「まア貴嬢、よろしいぢやフ御坐いませんか、今にも歸つて来るかも知れませんよ」

「いえ、また伺ひますから、今日は此ま、御免を蒙ります」

「ですか、そりやア甚だ、いや失禮ばかり、おのれ一人で饒舌り續けて、は、は、は、いづれ其うち倉橋から伺はせます、なアに貴嬢、動かなきやア首ツ玉に繩をかけて引き摺り出します」

「は、は、は、さやうな荒い事は遊ばさず、どうか御手柔かに、もし何處電話でも御通知下さいませれば、すぐ馬車を差上げますから」

「や、最後の一發、ドンと胸に徹へて痛み入りました、は、は、は、」
 なほも慇懃に送り出せば立關に待ち受けし馬丁そのまゝ走せ出せしが、引き違へて入り來りしは上田力、山の如き兩肩を怒らして達磨に似たる大兵肥滿、のツそりと停みながら眉を蹙めて頻りに此方を見る體、黒田おもはず笑を含んで指さしつゝ、
 「あれ、あれが先刻お話し申した男で、わづか五勺の米を二升七八合にまで炊き膨ら

した奇男兒です、は、は、は、」

いはれて綾子おもはず振り返れば、上田いよく目を圓くして不審の顔色、會釋しながら出で行く色香いよく訝しげに見送りつゝ、

「おい黒田、何だ彼女は、また乃公の顔を見て妙な事を言つたな、五勺の米が二升とか三升とか」

「は、は、は、失敬々々、今あの女に例の土左衛門汗を吸つた昔時談話をしたばかりのところへ君が來たからさ、彼女は倉橋が在官中の世話になつた大臣の娘で、ちよいく近ごろ當家へ來るがね、生憎今日は主人公不在で僕が代理を勤めたのさ、なかなか美だらう、も少し君が早く來ると頗る面白かつたに、惜しい事をした、しまア通るが宜い、久しぶりだ、は、は、は、」

「何だか理由は分らないが、相變らずの調子で、困つたもんだな君は、定めし蒼蠅く

「むゝさうか、なるほど、そこで倉橋が眞意、倉橋のこつたから軽々しく眞意も吐く、まいが、まづその態度は、どういふ工合だね」

「さアそこだ、それに就いて僕が過日、ちよいと何心なく倉橋の枕頭閑語といふ草稿を見たところが君、その中に某女に與ふと題せる一文、即ち彼美人に對する眞意だね、つまり我ために運び給ふ情は身に染みて嬉しいが、三年こゝに不出門の讀書生となつた我は今その戀に應ずる事が出来ない、と言つて我ために三年の色香を空しうさす事は猶更ら忍びないから、願はくは其戀を其まゝ清く他へ運んでくれ、もし三年の後、それも我を待つといふでなく自然に運ぶべきところが無くて三年の後、なほ今の戀を無事に保たれた曉ならば、むしろ我の方より進んで迎へようといふ意味さ、しかし君、こりやア倉橋が意中の祕密で自分の草稿中にある一片の文章だから、かはいさうに先方ぢやア何にも知らずに、たゞ一所懸命、苟も大臣の令嬢か戀

なればこそ遠路わざわざ此場末の草深いところへ来て、本人が居らなきやア僕にまで愛敬を滾して行くのさ、いッその事あの文章あのまゝ、途つた方が雙方の爲に宜からうかと思つてるがね、無教育の下種女と遠つて、また料簡の極めやうもあらうから、ねエ、君、君は何と思ふ」

「さればさ、そんな事になると僕は頗る例の僕で、返答に困るがね、相手は兎も角、此方が萬事、慎重の態度を取つて周到緻密の倉橋だから、まして外の事と違つて人事の大節、生涯の利害輕重に關するこつたから、大丈夫、失策のある氣遣ひは無いよ、捨て、置くが宜い、なまじツか坐傍から騒いぢやア却つて不可ない、君が今いた文章の意を倉橋の眞意とすれば、これを先方へ送る事は猶更ら出来ない、何故、なぜツて君、もし送れば先方の料簡を聞くよりも寧ろ其實は我ために三年を待てと強ふる結果に等しいから、倉橋として人知れぬ草稿に止めて置くのが當然だ、決し

て冷淡でも何でもなし、また事實からいへば、すでに三年の社會と斷つ、三年の戀を斷つは固より其道理だ、まして大臣の令嬢といふのが多少、今日の輕薄才子と其軌を同じうせざる倉橋の心に取って、好ましからぬところだらうよ、兎に角、君や僕の出る幕でないから、まア騒がない方が宜いね、わけて君の如き好奇漢が騒き出すと自分の面白半分で何を仕出來すか知れないから危険だよ」

「は、は、は、は、どうしても僕は昔から下手な謀反人に見られてるやうだな、しかし君、こいつア此まゝに治らないぜ」

「それ、そこが君の下手な謀反氣を起す基だ、悪い癖だよ、治るか治らないか、まだ知れもしないに、まして倉橋だ、君よりは由來の實例に於て失策のない男だから、氣を揉まずに安心して居れさ、あんまり君が餘計な事を仕出すと倉橋のため、僕が引き摺り出して來るぜ、引き摺り出して今度は川上の家だ、は、は、は、は、過日も川上が

言ッて居たね、もし黒田が根岸の手に餘るやうなら連れて來てくれ、乃公が一番引き受ける、乃公が引き受けた以上は議論と腕力の兩刀で戰ッて見る決心だよ、どうだ二三日、試みに轉じないかね」

「畜生、怪しからん事を言ッてるね、恐れ氣もなく僕に對ッて、よし、さう吐しやアそのうち潮合を覗ッて僕の方から逆寄の食客的に襲ひ込んでやるぞ、襲ひ込んで大に避易さしてやる、なアに汐入村の昔時でも彼奴に讓る筈は無いんだが、相撲でいふ苦手だね、僕のため彼奴は、しかし今日の彼奴は僕と互に呼吸も急所も違ッてるから却ッて恐るゝに足らない、敵は本能寺にありで先づ鼻アを苛めてやるね、由來この食客なるものは其家の鼻アが一顰一笑に依ッて苦樂を分つとしてあるが、僕は鼻アを苛めて身の安泰を謀るの工夫ありだ、をりく、夫婦喧嘩をさしてやッて其機に乗ずれば流石の川上も閉口するに相違ないよ、しかし彼奴の鼻は家付の内娘と來て

るから猶更ら以て便利だ、は、は、は、しかし君の細君にやア僕も一言なかつたね、
 現在あれほどの大病を肉親の如く介抱して貰った大恩ある上に、足らぬ勝の世帯を
 一人で斫り廻して養はれたのだから、おまけに君の辻占賣の参謀として大失敗を呈
 したのだから、黒田さんと呼ばれる毎に、ぎよツとしたね思はず、は、は、は、」
 「は、は、は、煙草の店番させられたにやア驚いたらう、しかし妻は今でも君の事を言
 ツて心配してるよ、妾のやうな無遠慮に喧しい女が居らないから、暢氣でせうが却
 ツて身の爲になるまいツて、をかした事をいふやうだが第一、君の食物の不養生な
 のを頗る氣にかけてるぜ、いくら癒ツても、あれほどの病氣後まだ丸一年にならな
 いと言ツて」
 「感謝、感謝、よろしく傳へてくれ、その點に就いては僕も近來、わけて注意して
 るから、時に小兒は達者かね」

「頭腦の中が僕に似ちやア困るが、幸ひ體軀が乃公に類してるから至極壯健、いまだ會
 て蟲氣もないね、願はくは將來あのまゝの無事で成長させたい、しかし君、君に子
 がなくツて實に幸福だぜ、もし最愛の妻を苦勞の果に失ひ其身は病氣に臥して深夜
 啼兒の聲を聞くに至ツちやア君、とても助からないぞ、よし病氣が癒ツたところで
 今ごろ食客的の暢氣ぢやア居られない、いはゆる乳貰ひの哀れを實地に演じるんだ
 からね」
 「眞實だ、その忘れ形見の哀れが無くツてさへ君、をりくく思ひ出すもの、元來かく
 の如き僕が僕だから他人は勿論、川上でも倉橋でも、さのみに思ひもせず、また
 言ひもしないがね、亡妻を知るものは實に君一人だ、多年散々の艱難辛苦に投じて
 今日といふ一日の安心も得させず、その果が寒中の古拾一枚に破れ三味線を抱へて
 人の軒に立たしたんだもの君、しかも僕が九尺二間の裏長屋で今にも知れぬ大病」

それを亡妻が身に代へての介抱、腸の九廻するたア君あの時のこつたぜ、竟に全く僕の身に代ッて死んだのだからねエ」

「さうよ、ありやア自分の命數に果てたんでない、つまり君が殺したのだから、常に僕がいふ通り將來いかなる事情があつても、君は再び妻を迎ふべき身では無いぜ、あれだけの妻に實際あれだけの苦勞さして殺したんだもの、もはや澤山だ、理に於て情に於て自然的の無妻主義だ、古風に言やア浮世を捨て、僧侶になるところだ、もし僕なら無常を觀するの餘り當世才子に冷笑一番せらるゝの愚を演じたかも知れない、しかし其處は僕の如き無用の愚物に於て始めて行はるべきもので、また死せし貞女の本意で無いんだから、君は宜しく奮勵して生前の苦勞を水泡に歸せしめず亡後の靈を慰めて大に報いなければなるまい、人の戀を面白半分で騒ぎ立てる時ぢやア無からう、どうだ黒田」

「一言なし、この目を見てくれ、僕が目からでも君、こんな水が、自然に湧いて出るよ」

其六

猿も衣裳といふ卑しき俗諺を浮世わたりの呼吸と心得て、おのれが生血を吸はるゝ高利貸に責められながら常綺羅を張ッて白癡おどしの呉服三昧、さては立寄る大樹の下といふ淺き言葉を立身の基礎と定めて、廣き天地を同じ足場に立往生しながら、眼前の小蔭に生涯の風雨を防ぎ得たりとする徒輩のみ多き世の中に、新聞記者となつて唄はれたる噴々の名を打捨て官吏となつて持て囃されたる前途多望を抛ち、當年こゝに三十五の一書生、しかも殊更に社會と絶ッて二年籠居の啞聾を學ばんとする倉橋幸藏、薩摩飛白の綿入羽織に例の日和下駄からころと響かして、馳せ來る車馬の砂塵埃を浴

びつ、悠然と兩國の廣小路を歩みぬ、

をりしも彼方よりシルクハットを帯て、綱曳の車を飛ばし來るは我在官中の同僚、しかも案外の無學にて常務の外のこと、毎に人知れず我を内々の顧問に頼みしほどの男なれば、他よりも深く交りし間柄と、倉橋さらに立寄りて懇懇に會釋すれば、彼また車を止めて其後の挨拶するかと思ひの外、帽子に手もかけず金縁の眼鏡越に目禮せしのみ、車上傲然として砂塵を蹴立てつ、稻妻の如くに馳せ去りぬ、

倉橋おもはず見送りて冷かなを微笑を含みながら、憫れむべし今日なほ吏臭の病ひ深く膏肓に入りしもの、怪しむに足らず翩々たる當世輕薄の小人が常、もし彼奴がために推薦せられたる下級の小吏に逢は、車の輪にかけて倒すとも其まゝに馳せ去るべし、そもく彼等が苟も政府部内の一人として電霆の如く叱咤奔走するの必要はいづくにあると、今更ら東京見物に出でたる田舎漢の赤毛布を有難く拜する心地して、また

日和下駄の音からころと濱町の方へ歩み出しぬ、

これもまた羽翼を縮め尾を垂れて屈するに似たれど、その實は今や將に大地を放れて飛ばんとする男、かの川上三吉と倉橋幸藏が奥庭の茶室に差對うて打解けながら、膝を進め聲を潜めつ、頻りに物語りぬ、

「まづ大體は今いふ通りの始末だがね川上、また某女に與ふといふ其一文は、つまり僕の感想を寓したもので、こりやア誰にも見せず自分の草稿中に葬つて置く筈だつたのを、あの黒田の奴め、留守中に引き摺り出して讀んだも宜いが、さて其後の騒ぎが蒼蠅いよ、うるさいのみならず、彼奴が性の無鐵砲にして横着なる、興に乗ずるあまり奇を好んで何を仕出來すか分らないからね、實は其邊の恐れもあつて、かたがた君へ相談に來たのさ。黒田を度外として、なほ他に上田あり吉田もあるが諸

びつ、悠然と兩國の廣小路を歩みぬ、
 をりしも彼方よりシルクハットを時て、綱曳の車を飛ばし來るは我在官中の同僚、し
 かも案外の無學にて常務の外の事ある毎に人知れず我を内々の顧問に頼みしほどの男
 なれば、他よりも深く交りし間柄と、倉橋さらに立停りて慇懃に會釋すれば、彼また
 車を止めて其後の挨拶するかと思ひの外、帽子に手もかけず金縁の眼鏡越に目禮せし
 のみ、車上傲然として砂塵を蹴立てつ、稻妻の如くに馳せ去りぬ、
 倉橋おもはず見送りにて冷かなを微笑を含みながら、憫れむべし今日なほ吏臭の病ひ深
 く膏肓に入りしもの、怪しむに足らず翩々たる當世輕薄の小人が常、もし彼奴がために
 推薦せられたる下級の小吏に逢はゞ車の輪にかけて倒すとも其まゝに馳せ去るべし、
 そもく彼等が苟も政府部内の一人として電霆の如く叱咤奔走するの必要はいづく
 にあると、今更ら東京見物に出でたる田舎漢の赤毛布を有難く拜する心地して、また

日和下駄の音からころと濱町の方へ歩み出しぬ、

これもまた羽翼を縮め尾を垂れて屈するに似たれど、その實は今や將に大地を放れて
 飛ばんとする男、かの川上三吉と倉橋幸藏が奥庭の茶室に差對うて打解けながら、膝
 を進め聲を潜めつ、頻りに物語りぬ、

「まづ大體は今いふ通りの始末だがね川上、また某女に與ふといふ其一文は、つまり
 僕の感想を寓したもので、こりやア誰にも見せず自分の草稿中に葬つて置く筈だッ
 たのを、あの黒田の奴め、留守中に引き摺り出して讀んだも宜いが、さて其後の騒
 ぎが蒼蠅いよ、うるさいのみならず、彼奴が性の無鐵砲にして横着なる、興に乗ず
 るあまり奇を好んで何を仕出來すか分らないからね、實は其邊の恐れもあつて、か
 たがた君へ相談に來たのさ。黒田を度外として、なほ他に上田あり吉田もあるが諸

これを此處まで打明けて談ずるのは君だ、既に社會を絶つて三年籠居の讀書生たる今の僕に、いやしくも戀愛などといふ閑日月は夢にもない、よし、あるにしたところで、實地に關すべき境遇でないから、木石の面を吹く一陣の春風、頑として動かなければ宜いやうなもの、現在しばらく相手の押し掛けて來るには閉口だよ、それも尋常の女なら一言の下に叱咤して睨み歸す事も出来るがね、在官中の世話になつた大臣の令嬢といひ、かの新聞一件下互に迷惑同士の間柄といひ、まさか君、胸邊を衝いて押し戻すことも出来ないところへ内には黒田といふ好奇な危険い奴が居るといふ始末、もし萬一このまゝ捨て、置いて、心にもない妙な工合で思はぬ事の成行から身を過るやうな馬鹿な奴に逢つちやア、實に遺憾だからね

「むゝなるほど、よく分つた、つまり此一文で見ると實際のところ、あまり君を隨喜渴仰して居らんやうだね、文章の表面は兎も角、裏面に於ては聊か敬遠策を取つて

居るやうに思はれるが、理が情に勝つて半面に感謝して居ながら半面に避けて居るといふ風かね、いはるゆる有難迷惑だらう」

「まづさうだね、はゝゝゝゝ」

「しかし君、何を避けて居るんだ、その嬢の容貌か、その嬢の性質か、その嬢の身分か、但しは單に君が三年讀書のためか、或は俗にいふ毛嫌ひ、どこといふ點の打ちどころもないが何となく蟲が好かぬ、氣に入らないとの事かね」

「その性質は深く知らないが、容貌と才氣の點、これを公平に見て先づ才色兩全とも稱すべきもんだらう、また毛嫌ひの蟲が好かないのと、いふでもないがね、避くる所以は三年讀書の我窻を驚かさるゝと、一事は矢張り身分だ、大臣の令嬢といふだけが何となく他日の一身上、面白くないやうな感じがするがね」

「ぢやア君、三年の間その讀書を妨げられずして三年の後また其父が大臣でなけりや

「ア宜いといふのかね、は、は、は、あれがあつたまゝ、寧ろ其日の衣食住に困らない程度の家^{いへ}に育^{そだ}つた女^{をんな}ならばといふんだらう、つまり君^{きみ}に情^{じやう}があつても戀^{こひ}が無いんだ、もし君^{きみ}に戀^{こひ}があれば三年^{ねん}の讀書^{どくしょ}を犠牲^{ぎせい}に供^{きやう}して其大臣^{そのだいじん}の令嬢^{じやうめ}たる^と其乞食^{そのこつじき}の娘^{むすめ}たる^と擇^{えら}ぶところでない筈^{はず}だからねエ、は、は、は、兎^とに角^{かく}この一件^{けん}を僕^{ぼく}に委^{まか}さないか、差出^{さしで}がましいが一應^{おつ}、その嬢^{ひと}に僕^{ぼく}が逢^あつて見^みたいから」

「いや實^{じつ}は、それで君^{きみ}へ相談^{さうだん}に來^きたのさ、どうか逢^あつた上で、つまり某女^{ぼうぢよ}に與^{あた}ふといふ此^{この}一文^{ぶん}の意^いを圓滿^{まんまん}に懇篤^{こんとく}に遺憾^{いへん}なく通^{つう}じて欲^ほしいんだ、倉橋幸藏^{くらはしかうざう}が名代^{みやうだい}とせず倉橋幸藏^{しかうざう}が兄^{あに}としてね、及^{およ}ぶかぎり感謝^{かんしゃ}の意^いを表^{へう}して先方^{せんほう}に満足^{まんぞく}を興^あへた後^{のち}、願^{ねが}はくは僕^{ぼく}ア妻^{つま}に持^もちたくない、敬^{けい}して先方^{せんほう}を遠^{とほ}ざくるでなく敬^{けい}して僕^{ぼく}の方^{ほう}から退^{しりぞ}きたいんだ、もし彼嬢^{かのひと}を三年^{ねん}の後^{のち}に喜^{よろこ}び迎^{むか}へて過分^{くわぶん}の妻^{つま}とするくらゐなら、今^{いま}までのうちに僕^{ぼく}は既に妻帶^{さいたい}したかも知^しれないから、この邊^{へん}を君^{きみ}よく察^{さつ}してね、うまく遣^やつて來^きてくれ」

「よし、承知^{しょうち}した、たしかに承知^{しょうち}した、決して先方^{せんほう}の感情^{かんじやう}を害^{がい}せず、また君^{きみ}の主意^{しゆい}を誤^{あや}まず品格^{ひんかく}を失^{うしな}はず、あくまで理^りと情^{じやう}とを盡^{つく}して來^くるから安心^{あんしん}し給^{たま}へ、しかし君^{きみ}、外^{ほか}の事^{こと}と違^{ちが}つて、あとの怨恨^{うらみ}は無^なからうね、しまつた、惜^をしい事^{こと}をした、あゝいふ筈^{はず}でなかつたなどと後日^{あと}で僕^{ぼく}を怨^{うら}んでくれちやア困^{こま}るよ、は、は、は、」

「なアに其時^{そのとき}は彼嬢^{かのひと}より更^{さら}に數倍^{すうばい}の佳人^{かじん}を君^{きみ}に強請^{ねだ}るから宜^いいよ、は、は、は、」

をりしも下女^{げぢよ}が來^きりていふを聞^きけば、今^{いま}しも黒田健次^{くろだけんじ}が立關^{ひんくわん}まで訪^とひ來^{きた}りしかど倉橋^{くらはし}のありと聞^きいて其まゝ、無言^{むごん}に立去^{たちき}りしとの事^{こと}、倉橋^{くらはし}おもはず眉^{まゆ}を顰^{ひそ}めながら、

「僕^{ぼく}が不在^{ふざい}中^{ちゆう}は一切^{さいくわい}外^{がい}出^{しゅつ}無用^{むよう}と禁^{きん}じてあるに、のこくと彼奴^{きゃつ}、こゝへ何^{なに}しに來^きをツたか知らん、今日^{けふ}に限^{かぎ}つて出^で先^{さき}を言^いはなかつたから、かしこし得^えたりで例^{れい}の面^{おも}白^{しろ}半分^{はんぶん}、君^{きみ}のところへ此^{この}一件^{けん}でも荷^{かつ}ぎ込^こんで一場^{いちやう}の坐興^{ざきやう}を貪^{むさ}りに來^きたんぢやアあるま

いか、しかし僕が居ると聞いて聊か一驚を喫したらう、面が見たかツたね、は、は、は、上田の家へでも廻ったかな」

「は、は、は、さうかも知れんぜ、奴のこつたから、第一いつまで彼奴を遊ばして置かないね、ろくな事を考へ出さないのみならず、病後の體軀を長く不規則に放任すると却つて再發の恐れがあるもんだ全體、毎日々々何をして居るね」

「悠々寛々、たゞぶらりと遊んでるなら君、まだしも蒼蠅もなくツて宜いが、朝ぬツと起きて夜ころりと寝るまで、終日べらく無用の駄辯を弄する體、實に奇だ、殆ど不思議だね彼奴の饒舌は、をりく、寧ろ呆れて感心する事があるよ、もし世間俗物の前で喋々と饒舌したら詭辯百出の奇才、その舌鋒や當るべからずとでも稱すべき男だらう」

「そりやア君、さうとも、我々こそ常に三文の價値もないやうにいふが、凡俗の前へ

出しちやア全くの奇才だよ、否、凡俗でなくツても實際、彼奴の舌と膽とは多く得易からざるもんだぜ、まして外に對ツちやア多少の要害を構へて萬事に注意もするだらうからね、つまり我々の前では血の氣の分量を知られて臟腑の中まで見抜かれて居るから、逆も無効だと觀念の極、自棄ツ糞に惡戯るのさ、は、は、は、見りやア小面が憎いが深く考へりやア可哀さうなところもあるよ、最愛の妻を失ひ失敗また失敗の餘り、病餘なほ一年を経ざるの今日だもの、たゞの奴なら意氣銷沈して凋れ返る筈だが、まだ終日の駄辯を弄して寸隙なき屁理窟を比べながら人を人とも思はざるの勇氣は寧ろ愛すべしだ、落着く先は山にあらず川にあらず紅塵百尺の眞ツ只中にありといふ一片の立退狀を壁に張ツて汐入村を飛び出した當時の勢ひを思やア、今昔の感、うた、懷舊の涙、今日こゝに各的となつて我々が一飯を預たるゝとは夢にも知らなんだらう、今も折角こゝまで訪うて來て君が居ると聞くと聞くとや否、また忽

「いや、よし、電話で聞いて見て、その上で出掛けよう、なアに時と場合に依れば父の大臣に逢って圓轉滑脱、如才なく氣に觸らないやう談し込んでも宜いさ、萬事まづ僕に任し給へ、決して君のため不調子な事をして累を後日に遺さないから」

「一切、たのむぜ、うまく遣ってくれたところで、さらに効果もないこつたがね」

「なアに却って面白いよ、これが世間一般の媒介口として儀式的一片の使者に行くでなし、嫌といふのを無理に乞うて是非とも貰ひたいといふでなし、身に餘る情の露に濡れて飽くまで感謝の意を表しながら、其間に犯すべからざるの意氣軒昂、ぴんと拗ねた男振を御覽に入れるんだからね、なか／＼趣味があつて氣概があつて一篇の戀愛論を實地に演ずるが如きところもあるからねエ、しかも相手が面白い、は、は、は、」

「まア君、さうでも思つて往つてくれ、端書のあり次第、様子を聞きに来るからね」

「いや僕から出よう、すぐその足で根岸へ廻るから、ついでに黒田を一翻弄してくれう、あんまり天下太平で置くと却つて餘計な謀反氣を出す奴だから、は、は、は、」

世間當流の才子は何か思ふ、門外寸刻を争ふ今日の社會を抛つて我に三年籠居の愚を守るの馬鹿さ加減あり、奔走花影を逐ふ今日の風流を捨て、我に三年木石の頑を守るの野暮さ加減ありと、笑を含んで濱町の川上が許を立出でながら、藥研堀の玩具屋に入りて巾着を探りつ、犬張子と風花車を買ひ求め、兩國橋を渡りて河岸傳ひに白本杭を過ぎ、あはれ上田力ほどの男が浮世に住み詫びし涙の宿、煙草の小賣店を門口より差覗けば、これも良人に連れ添ふ妻のお清が我子を膝上に抱き上げ乳房を含ませながら客を待つ體、かくなるまでの事情の仔細を知る目には一篇の哀史を讀むが如し、上田は居ますかね、いつも相變らず骨が折れますな、さアこれを、おい坊や、は、

は、一、所懸命に吸ひ付いてるわい。ちよいと顔を見せないか」
 「おや、有難う御坐います、まア綺麗な玩具を、これ御覽よ、しかし貴方そこは店頭
 で、どうか奥へお通り下さいまし、生憎今朝から出まして居りませんが、さやうで
 御坐います何處へとも申さないで、たゞぶらりと、もし貴方へでも、しかし濱町で
 すか」

「いや拙者が今まで川上の家に居ったのです、ぢやア根岸へでも出掛けたかな、なア
 に別に用もない、ついでに立寄ったので、時に黒田は來ませんでしたかね」

「いえ入らっしゃいませんよ、しかし貴方、ちよいとでも、お通り下さいましな」

「また出直して來ますから、そのまゝ、起つに及ばない」

「だつて貴方、あまり失禮で御坐いますもの」

「なアに失禮も何もあるモンですか、手が掛る最中の子持で、其上これだけの店を構へ

て、おまけに二十貫目の大男を年が年中の脊負ひ切りぢやア實に堪りますまい、よ
 くまア一人で出来るこつてすよ、全く上田は僥倖者だ、上田が僥倖だけ苦勞の多い
 理由だから猶更、お氣の毒ですが、まア堪忍してやつて下さい」

「ほ、ほ、ほとんだ賞讃に預つて恐れ入ります」

「いや實際のところをいふので、お世辭なンざア倉橋の柄に無いですよ、しかし其う
 ち、また更めて來ませう、小兒を大事になさいよ、もう子の出來た以上は少々上田
 を粗末にしたつて構ひませんから、氣に入らなきやア吐りつけておやんなさい、散
 散お世話を掛けつ放しにした横着な黒田なンかと違つて、その段は上田ですよ、道
 理の前には一言もない立派な男ですからなア、は、ほ、ほ、ほ」

「しかし倉橋さんをりくは妙な無理を並べて困りますよ、どういふモンで和女は乃
 公の鼻アになつたことの、なぜ子を産んだのと」

「は、は、は、上田なるかな、さて上田なるかな、は、は、は、」

家に歸りて我を迎ふべきものは、廣からねど幾年の風雨に寂びたる庭の景色と、萬巻を積まねど古今東西の智識を集めたる有用の書籍と、いづれも今の我ために人知れぬ無上の快樂を備へて待ちつゝありと、吾妻橋を渡りて馬道より土堤八丁に出で、をりしも夕暮の戀に急かれて魂魄脱殻の五體を載せたる車の矢聲に追ひ拂はれながら、家も庫も音なく流れ込むべき大門口を左に見て、生命の削り場所と聞えたる花里の裏路を歸りしは一入興ありて呵し、

我のありしとも知らで、のこゝと出で来るや否、そのまゝ踵を返して立去りし黒田めまだか、はや既に歸りしかと思ひつゝ、家内に入りて其部屋を差覗けば、例の煙草すばくと天井に吹き上げて肱を枕の横になりぬ、

「おい黒田、歸つたよ今」

「やアお歸りなさい、婆さん主人公が歸られたぜ、兎も角お茶を入れて持つて來な、夕飯の用意は宜いかね、乾してあつた坐蒲團を取り入れたかね、書齋へランプを點けろよ」

「おい、せめて其うちの一事ぐらゐる貴様が手傳つて遣つちやアどうだ、いやに今日は氣が付くぢやアないか」

「おい來た、ランプは僕が點ける、ついでに茶も入れる、さア大變々々婆さん何處だマツチと土瓶は」

「この横着漢、吐鳴つてばかり居たつて」

「やアなるほど身體の動くのを忘れて居た、は、は、は、」

片手にランプ片手に土瓶、やうく持ち來りし黒田の顔、じつと見詰めて思はず吹き

出しながら、

「おい黒田、今日、川上の家へ何しに來たんだ」

「いや別段、お取調べに相成るほどの儀でもないがね、は、は、は、知らなしたよ君が居るたア」

「居たツて宜いぢやないか、なぜ上らずに歸つたのだ」

「なアに上るほどの必要が無いからさ、實は今日、あまり無沙汰をして上田は兎も角あの妻に濟まないと、出掛けた序に、ちよいと川上へも寄つて見たのさ」

「む、さうか、上田ア何をして居たね」

「憫れむべし浮世なればこそだ、堂々たる偉丈夫も鼻アが一言の下に屈して、達磨の如き面を物陰から差出しながら小賣煙草の店番たア慘澹だね、しかも今朝こゝへ坐つたまゝ一寸も動く事を許されぬといふ始末よ、無論、鼻ア殿は今日中、裏の井

戸端に陣を構へて洗濯物に忙しい理由だがね、もし僕が居れば必ず店番の交代もしくは相役を仰せ付けらるゝ筈のところ、幸ひ今は君の厄介になつてゐるから安樂だよ、あの鼻ア氣に毒がなくツて性質は善いが元來の働き手で加之も男勝りといふ方だから食客的などには大の暗剣殺だ、なかゝ喧しいからな、しかし君に宜しくツて傳言して居たぜ、上田も二三日のうちに來るとき、は、は、は、」

「や、どうも呆れ返つて物がいはれない、この虚言家め、虚偽も虚偽、御丁寧に念が届いて行き渡つた虚偽だから恐しい、今日もし僕が行かなきやア全く眞實に受けらるよ」

「えッ、君が立寄つたのか上田の家へ、そいつア少々驚いたな、失敬々々」

「いよく、此方が驚くよ、づうくしき加減に、これが失敬々々で濟むかい、別に差支のないこつたから宜いやうなもの、もし必要の事實で人の名譽とか利害に關す

る事ででもあれば君、どうする、いくら何でも少しは慎まんと不可んせ、今あれほど長たらしい饒舌ツた虚偽が現れたのだから、はツと思ツて體裁わるく顔でも赤くすりやア、まだ幾分か優しいところもあるが、どうだい其面は、洒ア〜として實に憎いぜ君」

「いや悪かつた、以後は心得る、しかし面の小言をいはれちやア困るな、どうにも斯うにも君、生來で今更ら仕様がなないもの、恥ぢて薄紅を呈せざるところは友達甲斐に喜怒顔色に現れずとでも買ツてくれ給へな、は〜、は〜、は〜、は〜」

「第一その、は〜、は〜が不可ないよ、君のは〜、は〜は嬉々として笑ふにあらず、しかも用ひどころが違ツてるから全く人を嘲弄するに當るぜ」

「こりやア驚いた、よほど今日は御機嫌が悪いね、は〜、いや失敬、こりやア困ツた叨りに笑ツても不可ないんだね」

「面白くツて笑ふなといふンぢやアない、人を馬鹿にして嘲り笑ふなといふのさ、今日から僕は君に對する方針を變へて、さらに容赦なく會釋なく、たとひ多少の暇を潰しても徹頭徹尾、いち〜、喧しく喝破する決心だ、かの鬼千疋に對ふといふ俗世界の小姑と一般、今までのやうに放任主義の寛大に取扱ツて居ちやア、奴さん宜い氣になツて何を仕出來すか知れやアしない、この虚言家め」

「形勢いよく穩かならず、しかし寸陰を惜しむの君が多少の暇を潰してまでも現在この虚言野郎を訓戒せんとするの情誼、骨に刻し肝に銘じて」

「それ、そんな虚言家だ、今いふ口の下から、そも〜君のやうな感覺の圖太い人間が、安價請負の碑文か石塔のやうに、すぐ骨に刻し肝に銘するが聞いて呆れるよ、は〜、は〜、といふなア此處らで使ふ笑ひ聲だ」

「さう急に更まつて手厳しく出られちやア殆ど僕の身の置きどころなしだ、どうか君

「そろく」と順を逐うて次第に責め付けてくれないか、急激は却つて事を破るの基、折角の思召が寧ろ徒勞に屬するの恐れもあるだらうから」

「そろく」だの順を逐うて次第のといふなア普通の人間に對する言だ、君の如きは疾風雷霆、耳を掩ふに寸隙あらざるの勢ひで急激に事を破つた後、また更めて張り替へるのさ、は、は、は、また此邊で必要な笑聲だ」

「まるで僕ア太鼓だね」

「や、出來た、その一言こそ全く自己を知るの言だ、大きく重さうに見えても腹の中が空虚で案外に軽く、人が叫べば其手に従うて鳴るところ頗る似てるぜ、また君、は、は、は、だ」

「どうしたのか今日は平生の君でないやうだ、こりやア尋常事ぢやアない、は、ア川上と何か祕密の相談があつて、この黒田を」

「何か僕と川上が相談して、やられる覚えがあるのかね、ありさうだね、今日、このこと遣つて來た様子ぢやア、そりやア兎も角、濱町まで行けば兩國橋を渡るばかりだ、眞實に上田を訪うてやらないと不可ンぜ君、君は我々より彼夫婦に對して訪うべきの義理が多からう」

「いや一言なし、實ア今日も立寄る筈だつたがね、川上の立關で少々、は、は、は、まづかつたからねエ」

「何が君、まづかつたか知らないが、出るなら僕の家うちに居る時、晴れて出るが宜い、また少しの小遣錢こづかいせんぐらゐ言へば直ぐ出すから、悠々として用事ようじに出るが宜い、川上の立關けんくわんまで來て僕が居ると聞くと聞くと、すぐ其まゝ、無言むごんに引歸すといふやうな事があるものか、君にも似合はない、第一に僕が川上の家族かぞに對して面白くないよ、家内うちは兎も角、門を出てまで食客あそびごんじやう的根性こんじやうを持つてくれちやアなさけないぜ黒田、僕の

其七

木の葉に宿る一夜の露も滴りては十丈の幹を養ひ根を濕し、音もなき巖蔭の苔より垂るゝ下雫、いつしか集りて麓の溜津瀬となる、まして人の情の露雫、かりそめの思ひも積りて戀の淵となれば、我から身を投げ入れて浮きつ沈みつ、心の底を人に見られて笑はるゝまで、人知れず袖に忍ぶは戀の風情あれど、まだどこやらに物を怖れて眞實の戀にはあらず、包めども包めども穂に現れてこそ、秘せども秘せども色に出でてこそ、戀は曲者に捉れたる身の一入さらに哀れ深し、

身は大臣の令嬢として人に册かれ、しかも才色の譽れ高根の花として世に囃されつゝ、二十歳の今日まで玉の肌はたへに浮世の風かぜも知らず、まして戀といふ文字、たゞ學びの窓の書にのみ心なく讀みて過せしに、おもひきや今ぞ我身を食まれて遣る瀬もなく、いづ

こに脱れ出づべき道もなしとは、

父か大臣の住居と定めし魏々たる洋館の背後に、築山と泉水をめぐりて寸隙もなき植込の翠色を隔てつゝ、別に離れて建て増したる倭流の破風建築、古昔ならば西の對の屋とぞいふべきその端の別けて庭の景色に對ひし高縁の一室は、これぞ令嬢綾子が身に餘る此ごろの思情に堪へ兼ねて、夜なく、獨り圍の枕に語るところ、軒をかすめて差出でたる松が枝に隈なき月の宿る世や如何に、寢られぬまゝの身に染む雨の音など一入さらに恨めしの種なるべし、

わが身に乳を與へし乳母の姪なりとて、十四の春より今年二十七の曉まで、十四年うちつゞいての奉公に一日も身邊を離さず離れねば、あけても暮れても此女なくばとの御意に衣は汗に至る玄關の書生も憚りて輕々しく下女呼ばはりをせず、嬢様お嫁入の

荷物に生きて御飯を喰ふ化物が一個ありと、朋輩の女どもも恐れて萬事の機嫌とりどり、その勢ひ邸宅中を我物として令嬢を人質に取りしが如く、名は里といへば元來なかく甘からず、しかし浮世馴れて氣輕の伶俐女、今夜も何やら俄に召されて人知れず燈下の下に主従の私語、されど珍らしからねば耳欬つるものもなし、

「ねエ里や、今夜は、少し自分の思案に餘ること、和女に相談するんだからね、よく聞いておくれよ、よッく聞いて、そして和女の料簡を借りるんだよ」

「ほッ、ほッ、何で御坐いますか存じませんが、貴嬢の御思案に餘った事で婢の料簡などと、さやうな辻褃の合はない物の道理が貴嬢」

「いえ、あるんだよ、あるから和女に相談するのさ、しかし、わたしに打明けさせて和女、笑ッたり何かすると、きかないよ、眞實に、心から相談に乗ッてくれるだらうね」

「あれ、まアお嬢様 外の女では御坐いません、恐れながら貴嬢、里で御坐いますよ、何事が存じませんが、それほどまでの御言葉を勿體ない、お笑ひ申して濟みませうか」

「それでは、うちあけて、いふがね、和女、あの倉橋さんといふ方を知ッてるだらうね、そら、二三年前から洋館の方へ、ちよいと、よく來臨しッたぢやないか、此ごろは、お見えなさらぬが、先達の園遊會の時たゞ一人で木綿の羽織袴を着て在らッしやッた方だよ」

「洋館の方では能く存じませんが、あの時、木綿の羽織袴と仰しやれば、なるほど、お色の淺黒い脊の高い、あまり肥らなくッて、いやに四角ばッて眞面目くさい、皆様御愛敬の中で只お一人つんと澄まして在らッした方で御坐いませう」

「さう和女のやうに餘計な事を言はなくッても、あの方と分れば宜いぢやないか、を

りく和女は無駄口を聞いて不可ないよ」

「おや御免遊ばせ、つい貴嬢、ほ、ほ、ほ、ほ」

「あの方は、あの中で一番、立派な方なんだよ、お父様でさへ譽めて在らッしやる方だよ、それに和女」

「あら、さやうで御坐いますか、少しも存じませんで、御免遊ばせ、ところで、あの方が、どうかありませんでしたので御坐いますか」

「どうも、なさらないのだがね、いちく和女のやうにいふと、却ッて此方が分らなくなるよ、もう今夜は止して、また翌日の晩にでもしよう」

「おや、何か、お氣に觸りまして御坐いますか、お嬢様、どうかさう仰しやらずに、御機嫌をお直し遊ばして、里の不束者は平生から能く御存じで在らッしやるぢやア御坐いませんか」

「それなら和女、わたしの言ふ事を黙ッて聞いておいでよ」

「はい、恐れ入ります、もう決して御機嫌を損じないやう心得ますから」

「しかし何だか、妙に、言ひそ、くれて仕舞ッたよ、あんまり和女が口を出すので」

「で御坐いますから、お詫び致して居りますに」

「外でも無いがね里、あの倉橋さんといふ方がね里、ことに寄ると、まだ分らないんだが、もし、事に寄れば、わたしの、何になるかも知れないんだよ、お父様の思召では」

「おや、まア貴嬢、お嬢様、まアあの方が、で御坐いますか、いえ眞實で御坐いますか、お父様の御意が、第一そしてまた貴嬢の思召は如何で御坐います、まづ其事を伺ひたう御坐います、お嫁入遊ばす御荷物の中には生きて御飯を戴く化物があると皆に貴嬢、化物扱ひまでされて居ります里で御坐いますもの、いくら御前が何と仰

しやツても、こればかりは貴嬢、恐れながら婢が、いえ御心配遊ばすに及びませ
ン、里が付いて居りますから」

「あれさ、和女、また折角、しかけた談話の先を折るよ」

「だって貴嬢、お父様ばかり御自身お一人で、いくらお極め遊ばしても」

「まアお待ちといふに、わたしの事になると和女、すぐ狂氣のやうになつてくれるの
は嬉しいが、まだ談話の順序を能くも聞かないでさ」

「ほ、御免遊ばせ、しかしお嬢様、外の事とは違つて、御一生の大事で御坐いま
すよ」

「わかッてるよ、だから和女に相談をするのさ、つまり里や、折角お父様が、大勢の
人の來る中で折角お見立て遊ばした方だから、勿論、立派な方に相違なし、また、
わたしに、委細は無いのだがね、もし言ひ出してね里、萬々一、ひよツと嫌な返辭

を聞くやうな事があつては、第一お父様の御心配、お顔にもかゝる事、わたしだッ
て口惜しいよ、面目ないよ、ねエ里、外の事で無いからねエ、實は今まで和女に言
はなかつたがね、あの倉橋さんの御住居へも、たびく伺つた事はあるのさ」

「いえ、よく分りましたして御坐います、實のところ先刻からの御談話を、恐れ入ります
が、わざと婢が存じながら搔き廻しましたので、は、は、は、婢が狼狽へた風で、を
りく、呵しく、お叱りを蒙ればこそ貴嬢、こゝまで仰しやられたので御坐いますよ、
もし婢が最初から眞面目で伺つた時は、どうしても大事の御談話に御遠慮があつ
て、お心を悟り損ひますもの、いえよく分りましたして御坐います、この三四月以來、
上根岸の、かうく、いふところへ、といふ事も存じて居りましたが、あの園遊會に
木綿の羽織袴で在らした方が其方とは、倉橋様とは夢にも、それだけには里も、
少々驚きまして、まさか、あゝいふ方とは、しかし無教育な婢風情が目届く理由

「が御坐いませんから」

「だつて和女、先刻、何と言つたえ、いやに四角ばつて眞面目くさいとか、つんと澄ましてるとか」

「あれ、お嬢様、それは御無理で御坐いますよ、さつぱり存じませんもの、あの方が根岸に在らつしやる方で、倉橋様といふ事を、しかし貴嬢、殿達は御氣性たつ一個が男振で、外に何も入つたもので御坐いませんよ、べらくと嫌味つたらしい變に様子ぶつた人は、ねエ貴嬢」

「ほ、ほ、ほ、現金だよ里は、急に今更」

「おや、始めてお嬢様お笑ひ遊ばしましたね、ほ、ほ、ほ、貴嬢こそ却つて現金で在らつしやいますよ」

「虚偽お言ひ、和女が俄に空お世辭をいふのだよ、四角ばつて澄まして居ても宜いぢ

やないか」

「あれ、まだ根に持つて在らつしやいます事、御免遊ばせと申し上げましたに、しかしお嬢様、それに就きまして里へ御相談と仰しやるのは、いかやうな事で御坐いますか」

「今もいふ通りお父様の御顔にも拘るし、また自分にもね、だから和女が根岸へ伺つて、餘所ながら、はつきりとした御心底を聞いて貰ひたいのだよ」

「ほ、ほ、ほ、どんな大層な、むづかしい儀かと存じましたに、まア貴嬢、何で御坐いますよ馬鹿らしい、いくら世が逆さまになりますればとて、ほ、ほ、ほ、あんまり貴嬢御自身の御身分やら御容貌やら萬事、それを先方と引較べて御覽遊ばせよ、十四年も御身邊に御奉公いたしました婢、さやうな御使者は御免を蒙ります、涙がこぼれて貴嬢、それこそ口惜しう御坐います、勿體ない、あの方が、どれほど立流な方か

存じませんが、もし御前の御意なら、お暇になる覺悟で婢が申し上げます、實のところを申せば、あの方を御前が御召になつて汝に見處があるから令嬢を遣はすと、たゞ一言の御意が先方に取つて、どのくらゐ有難いか知れやア致しません、あまり驚愕して其場に氣を取失ひますよ眞實、お醫者騒動を見届けた上なら婢も始めて得心いたしますが、此方から貴嬢、馬鹿々々しい」

「まア里の勢ひ、どうしたんだらう和女」

「だつて貴嬢、ものには相應の釣合といふ事が御坐いますもの、御前も貴嬢も、御承知の上は奉公人の婢、かれこれと申し上げる場合では御坐いませんが、實のところ婢は泣きます」

「里、和女のいふのは、なるほど一應は道理に聞えるがね、喜んで氣を取失ふやうな人なら却つて、わたしが嫌だよ、それこそ涙が出るよ馬鹿らしくつて、しかし里、

あの倉橋さんはね、事に依ると、此方が、ほんとと謝られはしないかと思ふくらの人だよ、よほど下手から出て頼まないと、とんでもない恥辱を搔くよ、その邊を御承知なればこそ和女、お父様も、あれならばと御見立なすつたのさ、また此わたしもね、なか／＼世間普通の方では無いんだよ」

「おやまア、さうで御坐いますか、しかし何だか、まだ口惜しいやうな氣が致して、あきらめられませんかやうな心持が、まア倉橋といふ人、おや御免遊ばせ、あの倉橋様といふ方は全體、どれほど偉い方で御坐いますか存じませんが」

「ちよいと今のところでは、和女には分らないよ、また分る筈もないが、いづれ其うち、おひ／＼に、なるほどと思ふ事もあるからね、兎も角、わたしの名代として御機嫌を伺ひ旁お菓子でも持つてね、餘所ながら、心底を探つて來て欲しいのだがね」

「で御坐いますか、しかし」

「また和女、しかしなぞといふよ、嫌なら頼まないからね」

「いえ貴嬢、決して、さやうな事は」

「では和女、往ッておくれよ、うかく外の者を遣れないところだから、萬事かう打明けて和女に頼むのだよ」

「はい、心得まして御坐います、いつごろ伺ひまして宜しいものか、其邊も」

「いよく和女が、行くとなれば、また別に其時あらためて委しう、いふ事もあるがね、くれぐれも念を押して置くのは、あの倉橋さんを尋常の人と見ては不可ないよ、わざと立派な官吏を止めて今、あゝいふ境涯に在らッしやる方だから、決して迂濶な失禮な言葉を出してはならないよ、つまり和女が伺ふでない、わたしの名代だから、及ぶだけ丁寧にして、わかつたかね、いづれ出がけに委細の事をいふから、も

し和女の一料簡で不都合な事があつた時は、わたしが生涯の遺憾だからね」

一方よりは、身にあまる情の露に濡れて飽くまで感謝の意を表しながら其間に犯すべからざる意氣を含んで、ピンと拗ねたる男振を見せんがため川上三吉こゝに倉橋が名代となりつゝ、綾子の許を訪はんとし、一方よりは、かりそめの思ひ積りくゝて我から作りし戀の淵瀬に身を浮きつ沈みつ、果は堪へ兼ねて夜なく獨り閨の枕に語り盡せし言の葉、それを繰り返して思ふ人の眞意を知らんがため十四年來召使はれたる腹心の下女が綾子の名代となりつゝ、倉橋の許を訪はんとす、あはれ戀や戀、いづれに向うて誰が手にや落ちん、

綾子がために下女の里が根岸に向ふの時、倉橋がために川上が麴町に向ふの時、世を忘れ人を断ちて三年籠居の讀書の窓の紙一枚に如何なる運命や宿る、世に時めく人に

羨まれて富貴深窓の佳人が鬢の毛一筋に如何なる運命や宿る、
戀の神と運命の神とは、この名士佳人を弄んで、こゝに人間慘澹の底に沈めんとする
か、さては人生幸福の上に捧げんとするか、

倉橋幸藏續編

其一

縁の下に抛け込まれたる底ぬけの摺子鉢さへ、時には引き出されて雨落の飛沫を防ぐ
用となり、たま〜蕃椒を植ゑられては淋しき晩酌の膳の上に罷り出でて一口ひり、
と思はぬ功名手柄を賞せられ、ちよいと年越の梅の挿枝は貧家の春を慰め、夏は朝貌
が露の生命の置きどころ、秋は菊といふ隠君子の假の宿にも定められ、冬の雪には其
まゝ伏せて眺めて昔は味噌をするがの富士の山と唄はるゝ洒落もあり、盲目も二年の
修養には掴み取の按摩となりて一本の竹杖に闇の世を迷はず、鱈も三年たてば丸煮に
せられずして下手な鰻の蒲焼に匹敵せんとするの美味、四年の木に生る桃栗は取つて
喰ふに足り、五年六年の藪には筍を生じ、七年は人間生涯の幾段を分つべき大切の一

期、八年の赤松は床柱となり、九年面壁の達磨に悟道は開かずとも、苦海十年よく玉の輿に飛び乗る賣女さへある世の中に、いやしくも堂々たる男兒が志を立て、苦學十年の曉、そもく何にかなる、

しかも人並すぐれて五尺八寸二十貫目の大男、その苦學は徒らに俗界を卑しむの種となりて當世に容れられず、あはれ多年の難行も空しく時流に反いて其日の衣食も豊ならず、あますところは人知れぬ一滴の涙、いづこの誰に對うて注がん、たゞ我愚を歎じて眼前の妻子に謝せんのみと、例の上田力が柱に脊を凭せて山の如く聳えし兩の肩も何とやら打凋めながら、神か佛か無心に睡れる我子の寢顔じつと見詰めて、おもはず絞り出す滿身の溜息ほつと漏らせば、ランプの影に餘念もなく良人の肌着を縫ひし妻のお清、俄に針の手を止めて眉を顰めつゝ見返りぬ、

「もう良人お寢みなすつたら宜いでせうに、よほど夜が更けて來ましたよ、妾も今、

少して止めますから」

「なるほど、夜中このまゝ、梟のやうに眼を圓くして起きて居たつて用はなし、何の役にも立たない場塞ぎの厄介物だからね、しかし、頑是もない乳香子と蒼蠅い小賣店と足らず勝の貧乏世帯を一人で引ッ構へて一日寸隙もなく立働いた上、またこの厄介物の肌着を夜の目にかけて縫ッてくれるかと思やア、いくら夫婦の間でも實は聊か遠慮の氣味ありだよ、いや全く遠慮すべきが當然だ、無學文盲の世間普通にすら及ばざること萬々、いはゆる夫婦共稼ぎの下司に對しても大に恥づべきこつたからねエ、時に利あらず馬前ますとは古英雄の歎、糟糠の妻を堂より下さずとは志を遂げた奴の言、乃公は生涯の不運と不利で、鞭てども鞭てども奈何せん瘦馬の立往生だから可憐ら貞節の和女を糠味憎桶に押し込だまゝ、いつ救ひ上げるか分らないのが實に氣の毒だよ」

「ほ、ほ、ほ、何ですよ、また呵しな妙な事をつまらない愚癡を仰しやらずに早く良人お寝みなさいよ、馬が駈け出さなくつても牛が舞ひ戻つても宜いぢやアありませんか、幸ひ泥の中に足を踏み込まないで毎日々々糠味噌桶に手を突ッ込めばこそ分相應、どうか斯うか妾に持てる世帯ですもの、ほ、ほ、ほ、」

「は、ほ、ほ、ほ、さう言ッてくれるから乃公も生きて居られるのさ、妻に對して良人の力なく子に對して父の效なく社會に對して一個の民たる資格なし、そもく、これが満都の輕薄華奢を嘲ッて月漏る汐入村の片廂に苦學十年の功を積んで來た男かと思やア、いよく、何となく哀れを催して今昔の感に堪へずだ、また我みづから我愚に呆れて驚くの外た、浮世なるもの、影もなく聲もなくして襲ひ來る魔力の怖しきを知る、どうしても乃公は今日の人間界に時を得べからざる不適當な無用物だよ、全く當世の産物でないやうだ、は、ほ、ほ、笑ッちやア和女に濟まないがね、さりとて今更

ら泣いても無効だ、逆も此分ぢやア無念ながら前途將來ますます、覺束ない、まア馬鹿で頑固で活動のない兄弟を仕方なしの食客に置いた氣か、但しは死に別れた亭主殿の遺子に厄介な無器用な大男の守護でも置いた氣か、乃至また店の賣溜を覗ふ盜賊の用心にでも召抱へた氣で居てくれ、乃公を友白髮の末まで連れ添ふ現在の良人と思やア腹が立ッて辛抱が出來まいから、ねエおい、徒らに言を設けて細君の機嫌を取る一場の口説にあらず、また空しく返らぬ我身の愚癡を並べて一時の不面目を塗抹センとするの意にあらず、これが眞實の腸を吐いた乃公の本音だよ、良人といひ父といふも名のみあつて更に其實なき二十貫目の大男が、たゞ惘然と柱に凭れて楊枝一本も確實に削れぬ腕を拱きながら、すやくと何事も知らずに睡る我子の寢顔を見て其行末を思へば奈何ぞ涙なからんだ、また連れ添ふ甲斐もない良人の肌着を夜更けて後に縫ふ我妻の可憐に對しては轉た斷腸の苦痛ありだ、同じ布子一點

寒曝して年が年中の空腹を抱へて苦學難行をして来た中でも、川上の智にして事に害せられず物に滞らざる圓轉滑脱、倉橋の周到緻密にして言行一致の實をあぐるに勇なる、また吉田が年少の黙々致々として日夜の黽勉なるは儲置き、せめて彼の黒田が才氣の半分、いはゆる沙入村以來我黨一味の難物とせられ無鐵砲と稱せられ厄介物また油斷のならぬ横着漢として殆ど論外に置かれたる黒田が才氣の半分でも乃公にあれば、それこそ今日この境涯に甘んぜずして和女にも少しは世間の妻らしき妻とする事も出来るがね、悲しいかな持つて生れた天生の魯鈍愚直、つまり乃公の乃公たる所以は當世の社會に對して鏗一文の價值もない、思ふ事は悉く零に歸して爲す事また一切の無代價だ、我みづから我一个の上田としては時に或は却つて其無代價に誇り其魯鈍愚直を潔しとするの勇もあるがね、嗚呼こゝに妻子ある浮世の上田力としては屑屋の籠に飛び込まんとしても買手なきを奈何せん、たゞ和女のやう

な妻を持つたのか人間外に在せる何者か我を憐れんで天いまだ此愚物を市井俗間の白癡瘋癲と同一視せざるの賜物だ、ねエ」

「ほゝゝゝ、何を仰しやるんだか、さッぱり妾には分りませんよ、さア萬事このまゝ分らないにして寢て仕舞ひませう、ほッと臆けに分らないで持つた世の中、あんなり物事が判然と分り過ぎた夫婦は却つて葛藤の絶えない理窟同士で、また餘り足り過ぎた大世帯は良人、いつも却つて餘計な心配の種ですよ、入らざる世間を張るでなし苦しい外觀を飾るでなし、縁あつて連れ添うた夫婦の中に出來た子寶、是を何よりの娛樂にして、親子三人が病み煩ひもなく其日々々の御飯を喰べ、誰に氣兼ねも遠慮も打明けた内證これッきりの天地で、分相應に渡れる浮世を渡れば良人、それで宜いぢやアありませんか、人間の慾をいへば此まゝ、神佛にもなりたし、まゝにならぬが世界の規則で、思つた事の外れるのは良人ばかりでない證據は、どこへ往

かい」

「ほ、まづ物の凡例をいふンですよ、あの時だつて良人、あんなに妙な顔をしてさ、いつまで首を捻つて考へ込まないでも、おい清こりやア何たと仰しやれば其場で直に分りますもの」

「なるほど、さうだね、いや以後は心得て、あんまり無用な役にも立たない馬鹿けた心配しまいよ、ぢやアまづ和女といふ心丈夫な浮世の鐵盾の蔭で今夜の枕を高くして寝よう」

「さう、さうなさい、どこの戦鬪でも大將の活動は敗れた最後の間際といひますもの、世帯の落城も女房が切つて廻る菜切庖丁の刃金が鈍つて質草の矢種も盡きて討死した後のこと、まづ當分は安心して在らつしやいよ、女の出過ぎた業ですが此ま、漕げる沖まで妾が一所懸命に漕いで見ますから」

「時には甲鐵艦さへ覆る荒い浮世の浪風に對つて下手な手細工で繋ぎ合はした細材木の筏舟しかも櫓舵は竹棹一本で、どこといふ港灣の的もない渡海だから、わけて猶更ら心細く氣骨も折れるだらうが、乃公のやうな厄介物と乗り合はした和女の不運だ、あきらめて堪忍してくれよ」

「あれ、なさけない事を仰しやいますなよ、なアに良人、半分ぐらゐるは浮世のために瘦せて仕舞つたところで丁度、宜い鹽梅に世間並の女になれる肥つてうですもの、ほ、根の深い杉の大木を小刀で削るやうな氣になつて良人、いくらでも遠慮なく苦勞さして御覽なさいよ、どれだけ辛抱の出来る妾だか、自分では思ひの外、強い自信ですが、しかし妾の我武者に引き替へて良人は何だか此ごろ大變、急に弱くおなりなすつたやうですなエ、寒中に布子一枚の素肌で山のやうな肩を怒らして筑波嵐の北風に對ひながら吼えるのか呻るのか分らない地聲の遠鳴り、あれが上田

さんの詩吟で尤も御機嫌の宜い時だと承つた頃の勢ひ、今でも目に見えるやうですよ、また夏の炎天に蓮の葉の帽子で汗染みた浴衣の脊筋に地圖の形が出来て、薪雜木のやうなステッキを突き鳴らしながら、おいこら誰か居らんかと濱町の玄關へ破鐘聲で吐鳴り込んだ當時の勢ひは、どこへ消えて仕舞つたのでせう、少しも今ありませんよ、ほゝゝゝやいや家鴨め荷も天下の豪傑この乃公に對つて恐れ氣もなく勿體ない、ふざけ奉るな畜生め下々の下々女めと頭上から噛み付きさうな權幕で妾を人間外のやうに仰しやつた時は、いくら妾でも少々むツとして腹も立ちましたが、今では結句あの時分の事が何だが妙に懐しいやうですワ、人の氣といふものは變なもので、また夫婦の縁も不思議なものですねエ、はゝゝゝ

「馬鹿、つまらない事をいふない、あの時の上田と今の上田たア難易輕重、こゝが所謂る恐るべき浮世の理だよ。はゝゝゝしかし思へば今昔の感、随分この乃公も氣

樂蜻蛉だつたねエ、あゝ其時の婢、清なるもの今は我ために浮世の羅針盤ともいふべく指南車とも稱すべき貞淑温良なる大切の妻、和女なるものか、良人あつての妻にあらず實に妻あつての良人だわい、憫れむべし世間の凡流もし一片皮相の汚れたる俗眼を以て我を見れば、或は男妾とやいふらんだ、しかし五尺八寸二十貫目で今戸焼の達磨に等しい男妾と來ちやア頗る奇だ殆ど滑稽だ、はゝゝゝ聞説昔安部の貞任は腰圍七尺にして荒れたる猛牛を搏にするの膂力ありながら花の如き十九の妻が閨怨に胸板を突かれて縁より顛け落ち、かの元龜天正に鬼神と唄はれたる福島正則は侍婢に戯れて鼻アに見付けられ跣足のまゝで門外へ遁け出したといふから、乃公のやうな奴が何といはれても宜い當然だ、寧ろ其間の消息に人知らぬ神聖の戀ぞ宿れりだ」

「おや、怪しからん、誰が良人を、男妾なぞといひました」

ろツ

「はいく、どうか御免下さいまし、ほゝゝゝ」

家は貧しけれど互の心は賤しからず、身の境涯は淋しく夜具は薄けれど夫婦の情合いと濃かに暖く、そのまゝ我子を中間に抱いて俗ながらも川といふ字の世諺、やうやう枕に就きし折しも、隣家の軒下より何をか覗うて俄に吼え立つる犬の聲もろとも、我門口の戸を叩く音あり、

まだ寢入らぬまゝの夫婦が等しく耳を敏つれば、流石に冬の夜深を憚りてや俄に高からねど絶えず頻りに戸を叩く音、をりく脚をあけて吠え付く犬を蹴るが如く溝板を踏みしが、果は石を拾うて抛けし物音に靴音たてゝ來りしは巡查と覺しく、何をか一言二言いひ交せしうち、おもはず高く笑ひしは正しく例の黒田健次が聲、

進退に度なく出入に時なき奴なれど嚴格周到なる倉橋が許に食客的となつて以來、その實は殆ど禁足せられし筈の黒田が冬の夜更けし今ごろ何の用あつてぞ、戸の割るゝほど音高く叩き得ざりしは珍事出來にあらざる證據ながら、彼奴の横着なる犬に吠え立てられし立腹まぎれ巡查を嘲弄して如何なる面倒を惹き起すやらと、褻衣のまゝ飛び起きて枕頭の手ランプを提げながら門の戸を引き開くれば、もとより怪しからねど散々の過言無禮に巡查も今は意地となつたる體、此奴このまゝ交番所まで引き摺り行きて霜夜の立往生に一泡吹かしてやらんとの勢ひ、黒田は例の横車を押し出して冷かに笑ひつゝ碌々たる公等が知るところにあらざといふの顔色、いよく氣焰を吐いて屈せざる勢ひに上田おもはず中間を隔てて手ランプを雙方の鼻頭に差出しながら、

「おい何だ今頃、兎も角も警官に對して貴様が善くない、わるいよ貴様が、控へろ、控へろといふに、なアに貴官こりやア私の友達ですが仕様のない呑助で、少しでも

酒の氣が付くと忽ち方角の分らなくなる奴ですから何卒、いや決して別條御坐いま
 セン、おい黒田、早く一禮して這入れ馬鹿、いつまで何を貴様、ぐづぐづしてるン
 た早く願け込んで寝るなら寝ろツ」

元來の大力そのまゝ手を執つて小兒の如く引き摺り入れ、なほ巡査に對うて陳謝辯解
 さまざまに言葉を盡しながら、やうく戸を閉ぢて見返れば、何事やらと驚いて起き
 出でたる妻の面前に飢ゑたる猿の如く坐して頻りに會釋の體、

は、ア儲は彼奴いよく倉橋に追ひ出されたる夜中の狼狽、されど巡査に對ひ我に對
 うての勇氣もなく俄に妻に對うての殊勝さ、あれほどの奴も浮世の竈は流石に怖しき
 ものかと上田おもはず哀れを催しぬ、

「今ごろ黒田、何の用で來たんだ、第一また餘計な面倒を掛けるぢやアないか、巡査
 と争つたりして馬鹿な、まるで田舎から駈け出した生意氣の法學生と一般の初心だ、

見苦しい」

「いやはや何とも濟まない、しかし君あの巡査め」

「巡査なンざア何うでも宜い、全體、何の用で來たんだ」

「は、問はれて今更ら何とやらで聊か閉口だね、ともかく君、細君に寝て貰つ
 てくれ、この寒いに夜中わざ／＼起きて居られちやア氣の毒だ、やア坊が能く寝て
 るぞ、小兒の寢顔は可愛いもんだな、さア細君どうか寝て下さい、今ごろ唐突に手
 土産も提げず飄然と押し掛けて來た化物ですから、どうせ碌なこと無いです
 よ、は、は、は、勝手をいふやうですが實のところ、あまり聞かれて面白くない次第、
 願はくは氣兼ねなしに上田と對坐で私語低聲、なアに寢床なンざア入りませン、この
 まゝ曉に徹しても宜い覺悟、ついでに翌日の朝は水の一桶ぐらゐ汲み込んで置きま
 す」

「ほ、ほ、ほ、黒田さんは相變らず暢氣で在らツしやるよ、いつも氣樂な事ばかり仰しやツて、しかし御勝手とあれば失禮ながら妾の方も勝手に御免蒙ります、第一この通りの子持で夜は猶更ら人様にねエ、良人まだ火鉢に火が御坐いませうから、ちよいと搔き起して炭を、鐵瓶の湯も冷め切ツては居ますまいよ、お菓子か何かあれば宜しいにねエ」

「なアに和女、うツちやツとけよ、のこく今ごろ人の家を叩き起してさ、美味さうに巡查の權突を喰ふ好奇漢なもの、茶も湯も入るものか、飲みたきやア水甕の水でも浴せるさ、かまはずに寢て仕舞へ、優しくすりやアどこまでも附け入るか知れない奴だから、さア黒田、二階へ上れ、がやくと枕頭で此夜深に理由も分らない事を饒舌られちやア第一、小兒の邪魔になるから、そら手ランプと座蒲團を持つて行け、火鉢は乃公が提げるよ、ちよッ面倒臭い奴だなア今ごろ、せめて翌日の朝でも

來れば宜いに」

「まア君、さう言ツてくれるない、時あツて窮達消長は人生の免るべからざるところだ、かはいさうに天下の奇才も夜中まごくして此家より外に霜を防ぐの的が無いんだから、は、は、は、」

黒田は手ランプと座蒲團を抱へて上田は火鉢に鐵瓶を載せたるまゝ、前後して二階に上り行きつゝ相對うて今更に顔を見合はせながら、互に始めて落着いたる體、親に氣を兼ねて打語らふ兄弟の如し、

「おい黒田、いよく追ひ出されたんだな、出すもの出さるゝもの其いづれか仔細を問ふに及ばない、斷じて君が悪いのだ、世間普通の男と違ツて倉橋だからね相手が、まして此夜深に實際よくくのこツたらうさ」

「いや、さう頭上ごなしに斷案を下されちやア少々酷だが、なるほど僕が善くなかつ

たかも知れない、しかしまた強ち悪いとも思はない一片の理由があるのさ、つまり平生の僕が僕で、あまり謹厳正直の名を得て居らない方だからね、まして彼れ倉橋に對しては猶更ら信用が薄いもんだから、眞實こゝに倉橋を思つて彼が爲に苦心慘澹の友誼も、豈圖らんや却つて今夜の結果、出て行け、おん出てやるといふ始末で、はゝゝ、ついぞ怒つた事のない奴が君、眞赤になつてね、しかし僕が疊を蹴立て、起つた時、どツちが悪いか兎も角も上田に聞いて見ると叫んだ一言、はゝア諸は彼奴の情誼に篤き猶いまだ心中に我を得捨てず、舅があつて婚養子同然の川上を今こゝろ叩き起して迷惑させるより、先づ氣兼ねのない心易い君の家へ行けといふことだなと思つてさ、實は聊か氣の毒だつたよ」

「や、いよく、貴様が悪い、それほど分つて居ながら、あの倉橋を怒らすたア言語道斷、怪しからんこつた、乃公の家だつて少しは嗅アの手前を思へよ、まだ始めてな

ら宜いが、さんざ病氣の介抱まで念入の世話を掛けた上、唐突に夜夜中、食客的の突き戻されなざア、元來の氣の宜い奴だから別段、さして構はないやうなもんだが、第一この乃公に浮世といふ働きのない貧乏世帯だもの、いくら何でも聊か辛いところがあるよ」

「いや其邊さらに辨へざるにあらず、だから夜が明ければ翌朝すぐ出て行くよ」

「えゝ出るといふんぢやない、しかし出て行くつて何處へ行くんだ」

「はゝゝ、また倉橋の許へ逆戻りさ、つまり今夜のとりろは折角あの倉橋が十餘年來にないこと始めて怒つたんだから、まさか僕も例の調子で蛙面馬耳の横着を構へて彼が憤怒に恐れざるは禮にあらずと心得たがため、ちよいと洒落に一夜だけ追ひ出されて見たのさ、勿論、翌朝は君を煩はして、いはゆる放蕩息子が伯父御に連れられて親前へ謝罪に出る形容さ、さうしないと倉橋が呼び戻したくつても呼び戻す

竟に食客の謝絶の強硬手段を喰ったのだから、實は僕も可哀さうだよ、いはゞ雙方のため戀の橋普請をする心算で思はず出過ぎた杭を撃たれたのさ、はゝゝゝゝ」

「何だ馬鹿な、あの時も乃公が言ッたぢやアないか、倉橋の倉橋たる所以を知らざるものは、或は羨み或は疑ひ或は危むだらうが、事々物々に周到緻密なる天性しかも動かすべからざる主義と自信とを持つてる男が、生涯の苦樂を俱にすべき大切のことだから、捨て、置いて、置いても大丈夫、なまじツか餘計な口や手を出しちやア却ッて不可ンと言ッたのにまた例の面白半分で、くだらない有害無益の駄世話を焼いたんだな」

「いや決して僕は有害無益とは思はない、外の事と違ッて、苟も人事の大切に關することだもの、いくら僕だッて、まさか自分の慰弄に遣ッた理由ぢやないが、あの無愛敬にして四角張ッたる不融通の野暮漢め、叨りに僕を僕として」

「さアその僕を僕とせられるのが君の悪い證據だ、一事が萬事といふからね、平生が大切だよ、實際また叨りに僕を僕として扱はれる君でも全くの眞情から出た言行なら、決して怒るべき倉橋で無い筈だが、やはり君が不可ンに相違ない」

「や、君にまで、さう出られちやア我たゞ獨り清めりて屈原の出來損ひを學ぶより外に仕方は無いがね、實のところ斯うだ、あとで君も聞いて知ッてる通り、會て例の新聞で倉橋が彼令嬢のため飛ンでもない迷惑を蒙ッて以來、いはゆる嘘から出た誠と意地から出た情と氣の毒に堪へない心と實際目撃の出處進退とに就いて現在の境遇に感歎のあまり、いつしか全くの戀となッて竟に惚れ込んで仕舞ッたのさ、令嬢綾子なる今年二十歳の美人がよ、ね、ところで君、しばゝ根岸の奥の草叢にダイヤモンドの指環が輝いて襲ひ來るといふ始末さ、官を捨て社會と絶ッて三年こゝに籠居と定めたる讀書の窓も、をりく得ならぬ紅粉の香に驚かされて流石の先生も

頗る閉口の體、しかし元來木石ならねばで、まさか垣の外から悪太郎に馬の糞を抛け付けられた心地もすまいよ、否、竹細工か團子細工で作った男でない以上、その閉口の體も迷惑の様子も實は何等かのために彩られたる人間外面の假相で、もし腹の底を叩けば豈それ嬉しからざるを得んやだ、美人で恰憫で教育があつて身分が賤しからぬ才色兩全の尤物だもの、しかし蓼を食ふ蟲もあつて人の性には毛嫌ひといふ一種の妙な論外もあるこつたから、いまだ以上の事實を以て僕は倉橋の人事生涯に關すべき大切を速断しない、こゝに動かすべからざる證據は、かれ倉橋の秘せる草稿中に君、某女に與ふと題せる一文あつてね、つまり倉橋が綾子嬢に對する戀の觀念だ、實際に與へずと雖も自己が胸中を打ち明した一札依而如件といふ戀の證文を見ると、果して先生なか／＼大に意ありだ、たゞ三年の後を待つてくれといふところ少々まだ灰汁は脱けないが、こりやア先方が先方で倉橋が倉橋だから、ぢ

やア直に今夜からといふ理由にも行かないだらうよ、ね、是に於て僕は既に此戀を鮑の貝にあらざるものと認定した、爾來をり／＼倉橋に對つて促すが如く戯るゝが如く勧めて見るがね、先生なほ頑として固く冷かに耳を傾けざるの體、實は呵しいよ、ところが戀その頂上に達すれば男よりも女の方が武者振ひするもので、昨日の朝の八時ごろ、例に依つて倉橋が上野の圖書館へ出掛けた不在中、かの令嬢綾子が戀の使者として多年腹心の侍婢と覺しき二十六七の女、その名を里といふ女がね、やつて來てさ、なか／＼氣輕に如才なく浮世馴れた調子で、倉橋の歸宅を待つ間まづ僕を相手にして言葉を巧みに探りかけたね、つまり簡單に露骨にいへば、妾の主人が心情は斯うですが倉橋さんの思召は如何でせうといふ工合に持つて來たから、なアに萬一もし間違つた曉は僕の責任にする決心で、加之も本人同志といふぢやアなし、互に影武者の一騎討だ、まして悪いこつてないと思つて、僕は言つて仕舞つた

のさ、いはゆる草稿中の某々に與ふ一文そのままの意味を猶よく演義註釋して、すると先方の使者め、頗る満足の體で倉橋の歸るも待たず俄に立去つた勢ひ、まるで鬼の首でも取つたやうだったから、こいつ聊か饒舌り過ぎたかとも思つたがね、もはや仕方がない、あと追ツかけて取消も出来ないし、まさか鷺を鴉と言つた理由でもないと落着いて居たところが、おい上田、當世流の學校教育をうけた女は處女でも何でも油斷がならないぜ、しかも大臣の令嬢と來て交際場裡にも馴れた歐洲の才女で、恥づかしさ一ぱいの顔に袖屏風といふ倭風が乏しいから、まして戀は神聖とか生命の露とか天の人に賜はる最大無上な幸福とか都合の宜い現窟詰で勝手な道理の手傳つた惚れやうだから堪らない、昨日の今日、午後五時ごろ、本尊の綾子嬢より倉橋に宛て、直接の一封、殆ど誰でも披いて清き愛の神の命するところに従ひし我心の虚飾なき文字を拜み奉れといはンばかりの勢ひでね、自分が常に指して居

た小豆粒ほどのダイヤモンドの指環を添へて君、樂しく三年の後を待つとの返事を持たして來たのさ、倉橋かくと見るや否、くわツと顔色を變へて僕を呼び付けながら恰も守錢奴が倉庫の隅で盜賊を見付け出した如く、さア貴様どうする、此まゝでは濟まさないといふ騒動で、僕も少々辨解の料簡で争つたのが竟に一大議論となつてね、凡そ三時間あまり、なるほど段々と聞いて見りやア倉橋が怒るのも無理は無い、單に僕が草稿中の文意を漏らしたばかりでなく、實は君、此事に就いて川上を使者とし、しかも今夜、先方へ感謝的の敬遠策に遣る手筈であつたとは案外また案外、流石の僕も啞然として只ボンヤリと驚愕の外なしさ」

「それ見ろ、僕が言はない事か、だから役にも立たない餘計な馬鹿な白癡企謀の差出口をするなど言つたに、小人閑居して不善をなすたア全く貴様のこつた、實に倉橋のため氣の毒千萬なこつた、して其善後策を貴様、どうする決心だ、第一、本人の

倉橋ばかりか、川上にも意外な不面目をさすぢやアないか」

「いや、すぐに倉橋が委細の手紙を書いて近處の車夫を川上へ走らしたところが實に間一髪、つまり僕の僥倖で、もし二三十分も遅けりやア既に先方に出掛けるところだつたさうだ、その川上の返事に曰くさ、もはや致方もなし今夜は此ま、差控へて熟考の上、明朝あらためて委細の相談に行くが、ともかくも膝下の狗鼠あの黒田の奴を叩き出すべしと書いてあつたから堪らない、すぐに其場で退去命令、しかし川上も酷いよ、出せなら出せで宜い膝下の狗鼠あの黒田の奴たア實に酷だね、しかも狗鼠といふ字と叩き出せといふ字に御丁寧な圈點を施してあつたからな」

「知れたこつた、當然だ、まだ君子風のある倉橋だから貴様、まづ無事に追ひ出されただぞ、もし外の血氣者でもあれば手輕いところで鐵拳の五個六個、その素頭に時ならぬ岡丘を現じて差當り膏藥代にも窮すべき筈だ、さるを倉橋の寛大なる火

のやうになつて怒りながら、どつちが悪いか上田に聞いて來いとの一言、實に感泣すべき意味を含んで、ぢやア兎も角、翌朝は川上の行かないうちに乃公が連れて行くから、恐惶謹慎あらためて倉橋の面前で謝罪するんだ、宜いかね、しかし困つた事を仕出來したもんだな、倉橋は倉橋で別に思ふところあつて、わざと川上を感謝的敬遠策の使者に遣らうとしたところへ、また先方から戀の使者として念を押しに來るたア、しかも其處へ貴様のやうな猪鼻助が洒々り出て餘計な駄辯を弄したから斯の如き失策を演じたのだ、それも先方が世間たゞ一應の女流ならば宜いが、いやしくも倉橋が在官中の恩を受けた大臣の令嬢として、名實ともに輕からぬ相手と來ちやア随分むづかしいわい、善後策なく、面倒だわい、もし倉橋が所信を枉けて事實その戀を歓迎すれば一も二もないがね、さて勝軍蔓の細く弱いやうで實際の自信力は鍊鐵の如き男だからな、ともかく貴様、つまらない事をしてくれたよ、

どうなるにしたところが倉橋の生涯に拭ふべからざる一點の何等かを附けて仕舞つたぜ、事に窮して理に通ずる川上が居るから別段さして心配も無いやうなものだが」

「なアに君、今更ら僕が自分勝手の理窟をいふんぢやアないがね、この大失策それ或は他日の大得意になるなからんやだ、例を引くやうだが、曾て汐入村の昔、現在あの川上の妻は誰が過誤の功名で纏めた良縁か考へて見給へ、つまり富田の令嬢芳子が川上を慕つて戀の手が、りに扇子を書いて貰ひたいため、かの吉田に強制的の使者を命じた時、まだ浮世馴れない吉田が川上には一言の下に叱られ芳子には否應なしに迫られて進退こゝに谷ツた折しも、不意に横合から飛び出して菓子折を宙取の上、その扇子へ會釋もなく偽筆をしたなア君だらう、そいつが露顯して汐入村に吐鳴り込んだのは君、今の君が細君いはゆる當時お清明神なるものぢやアないか、しかも偽筆も横奪した不正の菓子折を開いて、上野の山の中で共喰の罪を犯したの

は誰だ、倉橋だらう、して見れば君、いづれも身に多少の覚えある方々で、さのみ今この僕一人を苛めて餘り立派な大口を開ける御人體でもあるまいに、は、は、は、とかく僕は今昔ともに一味の中の悪まれもんだからなア、もし翌日、川上が妙な事を言ひ出したら畜生、すぐ一本まるツてやらなきやアならない」

「よせ、馬鹿な、そゝそれが貴様の流で不可ンのだ、ありやアあの時のこツて、いはゆる已むを得ざる場合で臨機應變より出でたる自然的の滑稽だ、かねてより面白半分企てた貴様の失策たア似て非なるもんだ、もし翌日また變な屁理窟を並べ出すと困るぜ、宜いか、つまらない馬鹿議論を持ち出す心算なら僕は斷じて關しないから」

「は、は、は、なさけない、食客的の身ぢやア、まるで言論の自由を奪はれてるやうなものだ」

「さア大分に夜が更けて来たぞ、もう二時過ぎだらう、ぐづぐづいはずと階下へ降りて寝ろ、萬事は翌朝のこつた、また今ごろ床を敷き直すのも面倒だから毛布を被つて夜具の裾から逆に藻潜り込め、その代り少々ぐらゐる寝相が悪くツても僕が兩の脚で胴中を挟んで居りやア大丈夫、貧乏搖ぎもさすこつちやアない」

「は、は、は、は、こりやア驚いた、寢床の夜具まで食客的待遇と来たね、しかも夫婦が枕を並べて川といふ字に御寢相成るべき裾邊の一端を借り奉つて、少々閉口だね、まして君が蠻勇の大力で胴中を逆に挟まれたまゝ身動きもならず寝るに至つちやア頗る心細い、實は危険だよ、もし寢返りの拍子、うつゝに力でも入れられて見ろ大變だよ君、どうか胴挟みの責苦だけは許してくれ、おとなしく謹んで寝るから」

「は、は、は、は、しかし裾の方で寢相が悪くツちやア坊が驚いて目を覺すからだ、それくらゐの辛抱はしろ、この寒中の夜深に叩き出されて凍えもせず、屋の棟の下で無事

に寝られりやア結構だ、ありがたく思へ」

「は、は、は、は、その實は坊が驚いて目を覺すの恐れるにあらず、あやまつて細君を驚かすの事のあらんかと」

「ば、馬鹿ツ、早く寝ろ」

其二

だしぬけの退去命令に根岸の奥より追ひ出され、霜の夜途を草臥れ歩いて弱り果てた後、夫婦が枕を並べし夜具の裾に毛布を被つて藻潜り込みしのみか、山門の丸柱に等しき上田が大力の脚に胴中を挿まれて、流石の横着漢ぐうの音も出ず其まゝ曉まで一睡も得せず、をりく加之も横槌のやうなる重き踵を胸邊に載せらるゝ苦し紛れ、東天の鴉の聲を聞くや否、飛び起きて勝手覺えし臺所へ逃げ込み、がたくと何やら俄

の物音に、妻のお清まづ驚いて起き出でつゝ差覗けば、片手に水甕の柄杓を持って立往生の黒田おもはず苦笑ひしながら、

「やア細君お早う、前夜は失敬しました、時に嗽水盥は何處にあるンですかねエ」

「おやまア黒田さん、いつにないこと何故かう今朝に限って、お早インですか、もう少し寢て在らっしゃれば宜しいに、貴方まだ火も何も出来て在ませんもの」

「いや火も何も入りません、どういふもんか前夜は何だか變に妙な工合で、はゝゝゝ少しも寢られなかつたからですよ、まだ上田は覺めませんかな」

「はゝゝゝゝ實は貴方、お氣の毒でね、勿論、以前に貴方が在らっしゃる時分の夜具は解いて仕舞ってさ、そのまゝ御存じの通り引き續いての貧乏世帯で別に用意も御坐いませんが、なアに都合して敷き直せば、どうか斯うか一人分は出来るンですに、それぢやア却って黒田のためにならないって貴方、良人が無理にね、あゝいふ御不自

由を、お氣の毒で妾は夜中、碌に睡られないンですもの、相變らず頑固な變人ですから困りますよ、あの氣性を御存じの貴方なんかは宜しう御坐いますが、さぞ寒くって窮屈で御難儀をなさいましたらう」

「はゝゝゝゝ何だか妙に生暖かい毛脛で夜中絞め付けられて居たンですから、別に寒くはなかつたですが、をりゝゝ痛くってね、よほど心得て用心しないと危険ですよ、第一あの力ですもの、いやはや實のところは閉口、寒中の野宿も遣って見た事はありませんが、前夜より安心して寢られるから却って樂です、はゝゝゝゝ」

「全く濟みませんでしたね、その代り今朝の御飯に何か妾が御馳走いたしませう」

「いや、別に御馳走は恐れ入りますよ、なアに構はずに置いて下さい、どこの方角へ立廻しても此ごろは無勢力の食客的ですから、もはや腹の蟲が粗食に馴れて仕舞つたです、しかし久しぶりで折角の思召を無にするも何となく、ぢやア手数のかゝら

なくって滋養になる生鶏卵でも戴きませうかね、炊立の飯に味噌汁に乃至また焼海苔に添へても、ちよいと朝の腹加減に異なるモンですからなア」

「おいこら黒田、貴様そこで何を饑舌ツてるんだ、朝飯なンざア喰はなくツても宜いぞ前夜の約束、今朝は早く川上に先を越されないうち根岸へ出掛ける筈だ、まして腹加減が宜くなると氣が無精になつて動けないのが貴様の癖だから、そのまゝ水で面洗つて直に出掛ける仕度しろ、乃公も起きて此まゝ行くぞ、おい清、うかく其奴に構つてちやア不可ンよ、それ坊が目を覺した、早く来てやれ、あれ泣き出したぜ、早く、夜中に叩き出されの食客的分際で前夜の寢工合が悪かつたの朝の生鶏卵が滋養で異だのと、怪しからん事をいふ奴だ勿體ない、さア乃公も起きたぞ、また出掛けた途中で腹が減つて歩けないの人車などと贅澤千萬な事を吐して見ろ」

中間に立つて妻のお清は眉うち顰めつゝ、氣の毒けに堪へ兼ねたる體、黒田は水甕の柄杓を片手に持つたるまゝ、思はず首を縮めて聲なく笑ひぬ、されど嬉しくて笑ひしにあらず満面に物の哀れを催して半泣きの苦笑ひ、下手な畫工が描き損ねたる貧乏戎に似たり、

四通八達の巷に田舎芝居の大道具めいたる張り抜き山の山を築き上げんとするもの、都下百萬の耳を貫いて手細工の法螺貝を吹き立てんとするもの、十年苦學の曉よりも一夜の巧言令色に依つて身を立て、百年先見の明よりも一瞬の輕薄詔諛に依つて家を起し、いづれも白日晴天の下に百鬼横行の快を見て羨む世の中なれど、また殊更に眼前の功名利達を捨て、車馬の通はざる片蔭の草叢に閉ぢ籠りつゝ、わざと世に反き人に反いて三年讀書の一寒生たる倉橋幸藏そもく愚か狂か、我みづから我愚を守りて

斜めに當世を見渡しつゝいふ、到るところ智者と才子と鼻突き合はして日夜絶え間なく争ふ今日の社會に最後の勝利を占むるものは誰ぞ、三年の後に門を出でて智慧負の馬鹿勝なる滑稽を演ずるも亦一快事として、靜なること石の如く冷かなること水の如し、

しかも此石や頑として固く大象を繋ぐの美人が黒髪にも曳かれず、しかも此水や寂として寒く春風こゝに吹き送る落花の情にも流れず、出でては當世に馳驅するの境涯また取るに容易の身を持ちながら、手織木綿の羽織袴に日和下駄からころと響かせ、入つては一家團樂の快樂また早く迎ふべき身を持ちながら三十五歳の今なほ寂然たる一書生、此奴このまゝ死んで仕舞へば聊か哀れなりとて、倉橋幸藏をりく庭の夕日に我影を顧みて人知れず微笑を含みぬ、

汐入村の古巢を出でて筆を執れば忽ち噴々たる新聞記者の名を唄はれ、その筆と名とを捨て、官海に入れば忽ち前途多望をもて稱せられながら、また官を去つて根岸の奥の此草庵に三年讀書の一寒生となりし心のうち、既に取るの易きを知つて更に大に取らんがための用意、既に與みし易きを知つて更に大に戦はんがための籠城、一度すでに伸びて屈するは、更に屈して再び伸びんがための今こゝに、そもく何物の覆ひ來りて我觀念の定坐を窺はんとぞする、社會の名利か、外は勇にして内は怯なる當世の才子を學ばざれば眼前の功名利達に迫られて狂奔するの煩勞なく、浮世の貧か、門外一時の華奢に誇りて一家朝夕の生計に苦しむ今日の策士を學ばざれば人知れぬ涙を呑んで卑しき黄金の前に屈するの憂患なく、三年讀書の資力と三年籠居の米鹽とを貯へて身も心も一日は一日の長を加へつゝ、いはゆる慌てずして歩み走らずして急がんとする我には、軒を渡る木枯の淋しさも微妙の音楽となり、窓を叩く夜の雨も故人の

訪ひ來るが如く、一穗の燈下に書を讀んで得意の時は理想の帝王となり、東天の鴉に誘はれて曉の枕を欹つる時は無邪氣の小兒となり、食後の散步に庭を歩みながら垣を隔て、一步の門外を見る時には、おもむろに今日の社會を睥睨して乃公こゝにあるを知らずやの概あり、

されど悪魔の私語が如く今この倉橋幸藏をして人知れず心に怖れしむるものは、色香も深き情の露を運び來る戀の綾子嬢なり、また飼猫の悪洒落に狂ふが如く今この倉橋幸藏をして思はず耳を掩ひ眉を蹙めしむるものは、づうくしき野面のツペりと追へども拂へども始末に終へぬ食客的の黒田健次なり、彼は油の如く流れ來りて拭ふに易からず、これは鵜の如く粘り着いて去るに難し、

身に餘る情の露と思へば嬉しからぬにあらねど、我前途を思へば強ひて迎ふるに足ら

ざるの戀、このまゝ清く穩かに其人に返さんとせし計畫も、例の黒田が入らざる差出口に破られたる立腹まぎれ、大喝一聲の下に追ひ出せしまゝ、ゆうべ一夜は流石に善後策の思案とりぐ、まどろみもせぬ今朝は一入さらに早く起き出でつゝ、やうく夜具を疊み書齋を掃うて机に對ひながら、新聞を手取るも何とやら面白からぬ折しも、はや濱町よりの川上三吉が訪ひ來りぬ、

「やア遠路わざわざ、しかも大變に早く來てくれたね、僕はやうく今、起きたばかりさ、おい婆や火が出来たら直にね、湯が湧いたら兎も角も茶を出してくれよ」

「いや構はないでも宜い、時に黒田の馬鹿め、とんでもない事をして仕舞つたな、どうも彼奴の猪鼻助には困るよ、いよく叩き出したかね前夜」

「全く困りもんだよ彼奴は、人の事でも何でも例の自己が馬鹿一流の突飛漢で、くだらない餘計な眞似をするから實に迷惑だ、思ひも寄らぬ意外な間違ひを爲出來るか

らね、盜賊猫を飼つてると一般、油断も寸隙もなる奴ぢやアない」
 「しかし流石の横着漢も、よくよく悪いと思へばこそ、夜の夜中に追ひ出されて君、
 すごく出て往つたんだぜ、は、は、は、その時の顔が見たかつたね、また上田でも
 叩き起して、さうざ自分勝手の不平を並べながら饒舌り草臥れて寝込んだのだらう、
 どこへ往つても迷惑をかける奴だ」

「いや多少は悪いと思つたらうが、例の屁理窟を並べて彼奴、なか／＼容易に出ない
 で困つたよ、しかし前夜は僕も全く腹が立つたから、何と言つても聞かない、とう
 とう追ひ出してやつた、なるほど前夜は定めし上田が迷惑したらう、ところで君、
 差當つての善後策ぞ、どうしたもんだらうね、まづ君の意見を聞きたいと思つて、
 實は今朝、待ち兼ねて居つたのさ」

「いや別段、僕に意見も何も無いがね、兎も角このまゝ捨て、置く譯には行くまい、

つまり先方の感情を害せないやうに再び出直しの策を講じて矢張り飽くまで君が初
 志を貫くか、但しまた今この境遇と前途の目的とに差支の無いかぎり、ねエ君、い
 は、君に對うて堪へ難き情緒纏綿の芳心だもの、あらためて心機一轉、寧ろ歓迎す
 るか、以上兩様の外に論の無いこつた、取捨は固より君の勝手次第、しかし奇だよ、
 ねエ僕が君の代理として感謝的の敬遠策に出掛けんとするところへ、一步を先んじ
 て先方の使者が遣つて來るたア實に奇だぜ、しかも其間に黒田の如き突飛な奴があ
 つて餘計な業を爲出來した結果、先方では既に事なれりといふ扑舞雀躍、此方では
 南無三寶と聊か閉口狼狽の體、かの嘘から出た誠と一般の理で、こりやア物の間違
 ひから出來上る自然の縁で人力の外に於ける一種の約束事かも知れないぜ、は、は、
 は、どうだ意を翻して迎へちやア、しかし殊更に所信を枉けて人事の大切を輕々し
 く決するにも及ばない、もし猶いまだ君が心に嫌焉たらば、敢て辭せないよ、僕が

眼前の迷惑や多少の面倒を排して再び出掛けるぐらゐのこたア、すぐ今日これからでも使者に立つさ」

「なるほど、いや有難い、有難いがね、やはり僕は此ところ無情漢となつて當世の才子肌しはだに冷笑せらるゝ決心だ、實は前夜も寝ながら自問自答、いろくゝに考へて見たがね、結果、燃ゆるが如き情は氷の如き理に負けて仕舞つたよ、いづれ迎ふべき妻で、その妻なるものに對する注文も寧ろ世間の人よりは簡易に思つて僕が、あの才色を以て不足とする筈はない、また其父の大臣たるがため他日我前途に便宜幸運を喜ぶやうな卑怯ひけせんれつな氣も無い代り、また其父の大臣たるがため他日我手腕に幾何の眞價を殺がるゝかといふ、そんな穿ち過ぎた窮屈千萬な料簡も持たない、たゞ今日の都合上かの嬢を迎へられないんだ、つまり彼嬢のために三年讀書の此草庵を捨てる事が出来ない、否、捨てずとも其まゝで宜い三年の後を清く楽しく待つとい

ふだらうが、黒田が失策の結果、現に待つと誓つて來たが、歐洲的の教育を受けて大臣の娘に育ち加之も伶俐にして才女にして交際場裡の花とまで稱せらるゝ嬢が、果して三年この草叢に閉居せる一寒生を清く潔く守り得らるゝや否、その保證は彼嬢を生んだ親にあらす彼嬢を彩れる才色にもあらすして、たゞ彼嬢に宿れる一點の心にあるんだ、ね君、ところで彼嬢に宿れる一點の心なるものを保證に立て、三年の我意を安んずる程までに僕の戀愛は進んで居ない、また更に言を換へていはさ倉橋幸藏こゝに交際場裡の花と稱せらるゝ大臣の娘に三年の後に清く潔く待たしむるだけの名望地位いまだ來らず、固より天生の風采もなく監督の面倒も出來ず手数の違いとまも無い、既に夫婦となつて生別死別ともに寡居の操を守る女はあるが、いまだ伉儷の實をあけずして交際場裡の花に三年の操を守るは小説か淨瑠璃の文句にあるばかり今日の事實として多くないやうだ、もし誤つて其間に何等かの云々あれば

「實は川上、實のところね川上、こりやア今まで夢にも考へなかつた事だが、前夜、黒田奴が失策の善後策に就いて、一睡もせず千思萬考の曉、その注文を、いはゆる要求條件を備へて見たよ、しかし其注文がね、僕の今、君に陳べた議論も主義も其要求のためにせしが如き結果となつて、かの凡俗の輕薄才子に等しい觀があるから頗る躊躇してゐるのさ、そこで僕は此事に就いて第一義と第二義とを備へて君に託したい、つまり第一義は初志を貫く敬遠策の實行で、第二義は要求條件で、いはば己むを得ざる義理人情に迫られて避くべからざる場合を巧みに利用センとするもの、ちと言ひ悪いが打明さうかね」

「は、は、は、何だよ今更、僕に對して、倉橋幸藏が川上三吉に對して打明すも明さな
いもあるものか、言へよ、言つて仕舞へ」

「川上、願はくは根岸の奥の草深い此讀書室を歐羅巴の中央へ移して欲しい、金だ、

金が欲しい、少くとも五萬圓」

「や、出來した倉橋、面白い、實は僕の考案と一致だ、前夜その邊の事を考へて今朝こゝへ説きに來たところだ、しかし餘り君が議論の堂々たるに避易して差控へて居つたのさ、更に一步を進めて第一義と第二義の前後を轉じろ、思ひ切つて遣れ、肉體の交をなさざれば、事實に於て彼も清し我も清し、有名無實の戀が三年五年のうち君、どうなつても宜いぢやアないか、たとひ間違つて他へ嫁くにしたところが萬里の波濤を越えて君に何の不面目やある、よし不面目とするも名あつて實なき不面目を五萬圓たア面白いぜ、さのみ損はないぜ、もしまた君が學なり業を遂けて歸朝の曉、彼嬢が戀の神聖を保ちて嬉しさの涙と共に埠頭に迎へ出た時は、君また満身の愛を捧けて生涯友白髮の伉儷を契るべしだ、事に於て理に於て何の疚しきところやある、案を拍つて決せよ、移すべし大に移すべし、車馬の音響も遠く垣根に野瓜

の糞やあるかと疑ふ此草庵を歐羅巴の中央に轉宅さすたア實に快だ、よく言ツた、その五萬金を乃公が擱んで來る、見事、必ず取ツて來る」

「いや君なればこそ、この倉橋を戀と慾との兩道かけたる俗流の賤奴と見ずして、その一言、知己とは眞實これを言ふんだ、新聞記者となり官吏となつて社會に鼎の輕重を問ふの傍ら三年讀書の資力を貯へたのも、理は同じこつた、しかも五萬圓もし我に得らるゝ、曉は其うちの二萬金を兎も角も彼嬢の衣食料として舊の穴に返し、別に一萬金を三分して、あの哀れなる上田夫婦がため、あの横着なる黒田奴がためあの致々たる罷學の吉田がため、おのゝ願けてやツた後、残る二萬金が實に僕の資料、これを君に託して置いて五年間おもふまゝの修業がして見たいよ、しかし此要求にして遂げざるも亦、可なりだ、敢て乞ふの意にあらず、このまゝ、野狐の糞に伴うて三年の讀書なほかつ出でて戦ふに足る覺悟だからね君」

「なるほど、いよく倉橋なりけりだ、周到緻密、五萬金のうち二萬金を返して他日かの嬢に文句なからしめ、別に一萬金を三分するに至つては實に君だよ、しかし事ここ、に決した以上は寧ろ急ぐに及ばない、あくまで慎重の態度を取つて悠々と出掛けよう、ところで彼嬢から送つて來たといふ手紙、ダイヤモンドの指環は僕が預らう、かつまた此一件は成就するまで黒田の奴には猶更の事、便宜上、あの上田にも秘して置く方が宜からう、質朴剛直なる天性、餘計な心配さすばかりか或は單純な頭腦で眉を顰めるかも知れない」

「實際だ、ぢやア君と僕との外、天機を漏らすべからずとして置かう、しかし此秘密を黒田の奴が知ツたら、どうだらうな、それこそ彼奴、まるで狂氣だぜ、さア何故この乃公を夜の夜中に叩き出した、乃公が臨機應變の智を以て中間に策を施せばこそ事ここ、に至つたのだから、少くとも五萬兩の半分は乃公の分だ、天下いづれかコ

惑わくになる事ことと思おもつたがね、あまり彼奴きやつの所爲しよるが不埒ふち千萬せんはんで、實じつに僕ぼくも堪たへられなかつたからさ、いづれ今朝けさは君きみが何なんとか彼かれがために來くるだらう、來くれば幸さいひ」

「しッ、しッ、實じつア連つれて來きたんだ、しかし流石さすがに少々閉口せうくへいこうしたと見みえて、そツと忍しのんで臺所だいどころへ逃にげ込こんでるから、あまり大きな聲こゑで君きみ、そんな甘い言葉ことばを聞きくと彼奴きやつまた俄にはかに勢いきほひを得えるよ、つまり今日けふは兩兄りやうけいうち揃そろつた面前めんぜんで徹底徹尾てつてつてつびぎうぐいいはさないと不可いかン、僕ぼくは前夜ゆうべさんざ苛いぢめて置おいたから先まつ今朝けさは仲裁人ちゆうさいじんの格かくだ」

「ぢやア倉橋くらはし、すぐ此席ここのへ引ひき出だして僕ぼくと共に左ひだりから夾擊まきうちにしてやらうぢやないか、汐入村しほいりむらの昔むかしなら一時間じかんも蒲團蒸ふとんじしの刑けいに行おこなうて二日ふつかぐらゐの斷食だんじきに處しよする奴やつだが、まさか今いまは、お互たがひに、は、は、は、誰だれも他人たにんが居ゐるでなし思おもひ切きつて罵詈譎はりざんぼう、あらゆる嘲笑的てうせうてきの言語げんごを以もつて寸隙すんまもなく彼奴きやつを罵倒はたするのさ、つまり宜いい加減かけんのところこゝで上田うへだが挨拶あいさつするとして、結句けつぐあの黒田くろだめ腕力わんりよくさた沙汰あはで暴あはれる奴やつなら却かへつて始末しまつは宜いいが、

いつも口くちは災禍わざはひの大門おほもんを遠慮會釋えんりよせしやくもなく八文字もんじに開ひらいて毒どくを吐はく奴やつだから寧むしろ困こまるよ、今日けふといふ今日けふは幸さいひ、いはゆる暴ほうを以もつて暴ほうを制せいするの流りうで、まづ僕ぼくが先登第せんとうだい一いっに舌戰ぜつせんを試こころみてやらう、しかし倉橋くらはしが呼よび出だすのも變へんだね、やはり今日けふの挨拶人あいさつじん兼護送者けんごそうしやたる上田うへだに引ひき摺ずり出だして賞ちからはう、は、は、は、これに限かぎらず當分たうぶんまづ黒田くろだの事ことに就ついては萬事ばんじ、面倒めんどうの起おこる毎たびに上田うへだの引受ひきうけと定さだめて置おかうよ、彼奴きやつも上田うへだには別べつして特殊とくしゆの恩義おんぎあるのみならず、いざといふ時とき、彼かれが如ごとき横着漢わうちやくものは腕力わんりよくを以もつて制御せいぎよするより外ほかはないから、幸さいひの怪力くわいりきで、いはゆる目めに物ものみせるには頗すこぶる好都合かうごふだ、ねエ倉橋くらはし、は、は、は、

「は、は、は、さう彼奴きやつを僕ぼく一人ひとりの責任せきにんにされちやア困こまるよ、しかし兎とも角かくこゝへ連つれ出ださう、いやはや厄介やくかいな奴やつだわい」

倉橋くらはしと川上かはかみと上田うへだの三人にんが書齋しよさいに膝ひざを交まじへつゝ、をりく何なにをか頻しきりに高笑たかわらひの聞きこゆ

るは、いづれ我身の上と思へども例の黒田が蛙の面に馬の耳、石地藏の頭を蚊の螫すほどにも威ぜず、たゞ眼前の身に徹へて堪へ難く感ずるは、ゆうべ一夜を胸挿みの責苦に逢はされて苦し紛れに飛び起きつゝ、久しぶりの生鶏卵に有り付かんとせし間一髪を吐鳴られ、朝飯も喰はずに兩國より此家まで上田の大股に飛ぶが如く引き摺られしかば、半泣きの澁面に空腹を抱へて臺所の隅に蹲踞りながら、底光りの眼を据ゑて飯炊婆に對ひつゝ、

「おい婆さん、ともかく乃公に何か喰はしてくれないか、實は前夜あの喧嘩で夕飯も喰はずに飛び出したまゝ今朝また都合が悪くツてね、しかも一夜まじりともせず前後二度とも喰ひ外れて往返三四里の草臥れ儲け、はゝゝゝ、少々閉口の體だ、時と場合で仕方が無い冷飯の茶漬でも堪忍するから」

「はゝゝゝ、しかし貴方、まだ旦那様さへ今朝は御飯を召上りませんから」

「宜いぢやアないか、倉橋が喰はなくツたツて、何も倉橋より乃公が前に喰へない理窟が無からう、あの三人の奴等ア自分の勝手に時刻を外して喰はないんだ、乃公は時刻を外さず喰はうと思つて喰ひ損ツたから氣の毒だと思へよ、さア婆さん、すぐに出してくれ、飢ゑたるものは食を選ばずだ、何でも宜い」

「だツて貴方、前夜の今朝で御坐いますから、いやに更ツた事を申すやうですが、旦那様からの御一言ないうちは、奉公人の料簡に計ひかねます」

「何だ、倉橋の一言ないうちは喰はさないといふんか、はゝア乃公を世間一般の所謂る食客的、行き場所のない叩き出されの舞ひ戻りと見たな、おい婆、人間浮世の定命を越えた宜い年を仕ツて汝、そんな料簡ぢやア逆も無効だ、死際は宜くないぞ、そもく乃公の倉橋に於ける關係は主客いづれにあるか一朝一夕の故でない、實は置いて貰ツたんでない來て遣ツたんだ、前夜の如きも追ひ出されたんでなく、此方か

ら尻に帆かけて忽然おん出て遣ったんだ、しかし其まゝぢやア物事に角が立って倉橋が心配するから兎も角、もとの鞆に治つてくれといふ上田や川上が挨拶で、やうやう意を枉けて戻つて来たんだぞ、現に今あの書齋で三人の奴が談話も將來あらためて倉橋が乃公に對する待遇の相談最中だ、然るに汝こそ行き場所のない召使の分際で乃公の一飯を躊躇するたア奇怪千萬けしからんこつた、さア出せ、強ひて拒まば臺所の瓦落くた道具を片ツ端から叩き毀すぞ」

「ほゝゝゝいえ前夜あんまり旦那様に對して憎らしい事を仰しやつたから、ちよいと御主人のため復仇をしてあげたんですよ、世間普通の御厄介でない事は存じて居りますよ、さア召上れ、しかし黒田さん、貴方のやうな御立派な方が朝御飯の出さないで居直り強盜の恐喝文句に似た事を仰しやるかと思へば、何だか妙に哀れツほくて、おいとしう御坐いますよ、さア御遠慮なく存分に召上れ、もし貴方が婆

の子でもあれば泣くところですよ、ほゝゝゝ」

「え、馬鹿、いやな事を吐すない、瓜の蔓には瓜だ、かりにも恐れ多い汝のやうな俗腹に乃公のやうな男が宿つて堪るか、また古今東西の豪傑も英雄も腹の減る時は減るに極つたもんだ、登山の釋迦は修業の傍ら牧畜を營んで牛の乳を呑み面壁の達磨には竊に蛇の蒲焼を運ぶ弟子があつて九年の觀念を遂けたといふこつた、しかし婆さん空腹の膳に對うて小言をいふでもないが、今日の味噌汁は嫌に上澄みがして平生より薄いやうだぜ、煮過ぎた葱が水底の亂抗に等しく横たはつて申譯の味噌汁が僅に濁れる體、鮎か鯉が釣れさうだな、朝の汁は宿屋の儀式的にあらず、全體また味噌といふ奴は腹に溜つて飯を助けるから寧ろ濃くする方が經濟だぜ」

「ほゝゝゝよくまあ、いち／＼貴方のやうに理窟が言へますことね、お氣に召さずば、お止しなさいよ」

「いや喰ふ、是でも空にやア不味くない、二等米の飯が最上飛び切りの鮮米に等しいだ、は、は、は、時に三人の奴等アぐづぐづ何を饒舌ッてるか、いづれも悟道の開けない野暮漢だから困るよ、大聲は俚耳に入らず、定めし乃公を悪く吐してるんだらう、横槌に目鼻を付けて驚き挿槌に耳を生して立騒ぐ人間は談せないよ、ねエ婆さん、とかく油断のならない世の中なもの、乃公なんかア平生の度胸が据ッてるから庭の石燈籠が不意に手を出して招かうが、鬨が舌を出して足の裏を舐めようが、悠寛々びくともする男でないよ、は、は、は、」

「おや、まるで化物屋敷の講釋を聞くやうで御坐いますね」

「化物さ、今の世の中ア化物の寄合だ、どこに當然の人間らしい奴が居るものか、天下いたるところ皆これ怪だ、婆さんなんか花を欺く昔の姿が化けたのさ、あの倉橋の如きは石地藏の化けたので、川上は鰻の天上し損ッた奴、上田は其母が曾て奈

良の大佛に臍の穴を舐められたと夢みて、あツと驚く拍子に孕んだから、あの通り無様な滑稽的に馬鹿大きく出来たのさ、乃公か、乃公は某年某月某日の曉、天の一方に微妙の音楽が聞ゆると共に生れたから、こんなに優しく高尚で加之も割合に陽氣の性を含んでるのさ、は、は、は、」

をりしも背後に大喝一聲、この馬鹿野郎と叫ぶ聲に驚いて振り返れば、奥の書齋にありと思ひの外の上田力、のツそりと山の如く立ちぬ、

「此奴め何だ、づうづうしく平氣で飯なんか喰ッて、さア奥へ來い、三人で貴様に言ふ事があるから」

「やア失敬々々、今すぐに行くよ、あんまり君、腹が減り過ぎちやア身の毒だと思ッてね、は、は、は、もう一椀で仕舞だから、すぐに罷り出るよ」

「やア失敬も無いもんだ、貴様のこッて三人が心配してるに、飯も宜いが石地藏だの

鰻の化けたのと、奈良の大佛に臍の穴を舐められて誰が出来たんだ、此猪鼻助め、微妙の音楽に連れて優しく高尚に生れたなんて、よくまあ氣恥づかしくもなく吐すよ此奴」

「は、は、は、聞いて居たンかい、そいつア少々まるツたな、しかし石地藏は萬事に手固い男、鰻は喰ひ占めて美味のある男、まして奈良の大佛は天下の名物男と稱揚した眞意さ、豈敢て友を讒するの我ならンやだ、ねエ婆さん汝が證人だらう」

「馬鹿、どうでも宜いから早く来い、けふは倉橋だツて川上だツて貴様また平生の流で横着に出ると不可ンぞ、川上は措置き、僕は兎も角、よほど倉橋は怒ツてるから實際、もう黒田とは十餘年來の情誼を捨て、絶交するとまで決心して居ツたのを、やうく我々二人が辯解的に説いたところだ、うかくすると生涯また再び得べからざる益友を失ツて仕舞ふぜ宜いか、あとで後悔しても無効だぞ」

「そりやア聊か驚いたね、眞實か君、ぢやア俗間の小人原と一般、そツと忍んで立聞きでもしてやる筈だツたに、光風霽月さらに君等を疑はずして赤子の慈母に於けるが如きで居たなア失策だツた、をりく僕は餘り罪が無さ過ぎて困るよ、將來は力めて嫉妬偏執猜疑、なるべく女々しく振舞うて執念深く疑ひ、以て刎頸の友に對する猶かつ敵に對するが如く要害堅固たるべしだ、あ、己ンぬる哉、嗚呼なさけないかな、もはや一個人の食客的を脱して更に大に社會の食客的たるべき時節到來だ、ねエ君、倉橋が斷然さういふ決心、たとひ君等が辯解に依ツて僅に實行せずと雖も彼にして一旦その心あらば僕また殊更に意を枉けて屈しないから、思ふだけの事を言ツた上、あらためて出すなら出す、出るなら出ると男らしく決しよう」

「え、今更ら引かれもの、小唄めいた事を吐すに及ばない、早く来い、しかし今日は乃公に對しても倉橋の手前、くだらない屁理窟を並べると聞かンぞ」

「君に對しては並べないさ、しかし倉橋の手前、もはや遠慮すべき場合で無いからねエ」

「どうも困った奴だな此奴は、あゝいへば斯ういふと腸が逆に糾れて根性魂が横に曲ツてる奴だから」

流石の上田も呆れて其顔じつと見詰めしまゝ、持て餘して立往生の折しも川上三吉また來りて斯くと聞くや否、冷かなる微笑を浮かべながら黒田の頭上より見下しぬ、

「おい／＼上田、いち／＼此奴のいふ事を正當に受けて居ちやア不可ンよ、こりやア君、咽喉の調子で絶えず無意味の熱を吹く一種の蓄音器だよ、言論不用だ、幸ひ君の大力で首ツ玉のところ、ちよいと手輕に捻んで往ツてくれ、汚れた襦袢と猫と横着野郎は捻み出すに限るよ、ぐ／＼言葉を交へると面倒だ」

「ちやア川上、聊か可哀さうだが捻み出さうかね、どうだ黒田、少しやア痛いかも知

れないぜ」

「えッ止せ、ふざけるない、行くよ、無事に歩める脚が二本も揃ツてるんだ馬鹿々々しい、とかく何事に付けても乃公ばかりを餘計な厄介視するから、をり／＼癢に觸ツて知れ切つた事でも態と文句を並べてやるんだ」

「は／＼／＼こいつア呵しい、よほど自分ちやア厄介視されざる要素を備へてる覺悟だね、しかし不幸にして我々の見るところ、どうしても君を無くて叶はぬ必要の人間たア思へないよ、は／＼／＼」

「ところが何ぞ知らん、づ／＼しき鐵面、蓄音器に似たる駄辯、呆れ返る横着、度し難い素根性、始末に終へぬ難物、餘計な厄介者、入らざる猪鼻助、此奴この馬鹿野郎などと君等が常に僕を度外視して言ふところの罵詈雑言は、他日また事實の上より元利取揃へて返濟の時機もあらうよ」

「いや無利息にして置くから生涯のうちには元金だけ返してくれ、せめて半金でも宜いよ、ねエ上田、しかし覺束ないもんだな、この様子ぢやア棺桶の中へ證文を巻いて入れざアなるまい、逆も返して貰ふ見込が無いぜ、相手が此先生だもの、は、は、は、」

「いや言うたな、吐したね、よく言ッた、よく吐した、面白い、今の一言だけは川上あらためて他人行儀だぜ、一場の座談にやアしないぞ、おい上田、證人になッてくれ、宜いか川上」

「は、は、は、願はくは君がため、今の一言をして無意味の坐興に了らしたくないね、どうか飽くまで他人行儀として忘れざらんことを祈るよ、兎角君は萬事を坐興がツて忘れたがツて困るさ、しかし死んだ貞節の島女が事を坐興がらず、まだ黒田健次といふ自己の名を忘れないのが感心だ」

「や、いよく暗くわい、畜生々々」

「誰のこツた、僕を罵るの言か、將また君みづから君を稱するの言かね」

「え、何とでも言へ、大物たま〜時あツて小物に譲るの奇あり、つまりは元利返濟の曉だ、はッはッはッへッへッへッ」

「何だか不思議な妙な笑聲ぢやアないか、聊か人間を遠ざかつた鶴に類してゐるやうだぜ」

「いや君の耳にやア、不思議に妙に物珍しく聞えるかも知れない、こりやア時を得ざるの英傑が憤慨の情に餘ッて臟腑の底から絞り出す笑ひ聲だ、へッへッへッ、どうだ聞いた事が無からう、伯樂にあらずんば千里の駒の嘶きを知らず、もの、不思議と珍しさは多く無智と無識より来る、また鶴といふが鶴は我國に於て傳へ聞く源三位頼政の時代たゞ一度より出た事のないもんだ、その聲の凡鳥卑禽に類せずして俗人に怪しまるゝは當然さ、へッへッへッ」

しや人に見られて問はるゝかと、あはれ今更に心弱し、

父は大臣中の有福者と稱せられ、其身は令嬢中の美人と囃されて、富貴權勢の家に生れ當世教育の文物に育ちつゝ、しかも才色兩全の名花といはるゝ身なれば、我から一人の戀に亂れずとも蠅蟻の甘きに寄り來る萬人の戀を見渡して、思ふがまゝ富も才も名も地位も男振さへ心のまゝの選取にすべき身を持ちながら、勳位爵祿の家に生れし幾多の美男を取らずして俗物の目を驚かす提燈に釣鐘の世諺、根岸の奥の草叢に傾く軒を宿として讀書の窓は野狐の糞と伴ふ今年三十五歳の男、しかも洒々たる當世の風采もなき無縁孤獨の一寒生に對うて人はいふ珠玉の如き満身の愛を注がんとは、

同じ住居なれど樹立深き廣庭を隔てゝ表の洋館と奥の日本家に分ち、父子なれど日夜

の政務に違なき身と朝夕の世事に差出ぬ女性の身なれば、互に解けて語らふべき食堂の團欒も、をりくは逢はぬ勝に其日を過す事さへあるに、一夜、父の大臣が近來めづらしく公私の用務も無しとて、うち寛いだる和服のまゝ我居室に引き籠りながら、人を遠ざけて娘の綾子を招き入れつゝ、食後の菓物に一入の心地よけなる體、はや半白の老の額際に笑の筋を集めて語り出しぬ、

「ねエ綾、まだ小兒のやうに思つて居たが、もはや和女も今年は二十歳だな、いつの間、さう大きくなつたものかね、はゝゝゝゝゝゝ」

「あれ、お父様が、ほゝゝゝゝあらたまつて何を仰しやいますやら」

「いや二十歳だわい、ところでね、いつまで其まゝには居られない、去年までは母が居つたから別に心配もしないで濟んだものゝ妻が死んで以來、どうも氣にかゝつてならんよ、また兄が英國から歸るには二年もかゝるだらうし、今こゝで和女を手放

すのは淋いしがね、相應のところがあれば早く、いや都合で婚に取っても宜いが」
 「いろく御心配かけますばかりで」

「なに親の役目だ、ところで和女、これといふ希望でもあるかね、差支のないかぎり
 和女の意に任すから、もし其人があれば言うて見るが宜からう、人事は大切だ、決
 して軽々しく眼前に走ッても困るが、また入らざる遠慮にも及ばん、ね、綾、ど
 うだ」

「はい、有難う御坐います、別段妾に、これといふ其人も、しかし、お父様の方に、
 もしや」

「む、乃公の方へは、諸方から直接間接いろく言ひ込んで来たものも随分、あるが
 ね、さてまだ、どれといふところもない、いはゆる世諺にいふ長し短しでの」

「でも、お父様の思召では、官吏で御坐いますか、また實業家その他、どういふ方が

お氣に召しませうか」

「は、取るところの業は何でも構はない、また富の程度も一家を維持するに困
 るやうでは不可んが、ともかく和女の幸不幸は只その人物にあるこつた、たとひ學
 力と地位と財産とが揃ッて居ても、人間に缺點があつては頼むに足らん、むしろ人
 間が満足でさへあれば學問と地位と財産とに多少の不足があつても宜いくらるだ、
 つまり今日までは世の中が不調子で、往々無學の馬鹿堅い奴が金を持つて當座に如
 才のない輕薄才子が地位を作るやうであつたが、もはや社會の風潮が一刷新の時代
 で、地位も財力も只その人物に應すべき自然の調和時代が来たから、猶更ら以て能
 く其人間を選択しないと不可んわい」

「生意氣な事を申すやうで御坐いますが、實は、妾も、さやうに存じて居ります」
 「さうなくては叶はない、ところで、それに就いての和女の其人は無いかね」

「はい、別に」

「急ぐやうなもの、外の事と違つて今が今差當り、和女の方になれば、乃公が其うち見立て、やらう、時に綾、をりく、和女は、あの倉橋のところへ往つたさうだな、根岸に居る倉橋幸藏よ」

「はい、さう度々もまゐりませんが、あの新聞で、あんな事を書かれました時、お父様の御許容を受けて、また園遊會の後ほんの二三度ばかり」

「どうだね、倉橋は、いつも何をして居る」

「生活むき萬端その外も一切すべて、官吏をして居りました時分と違つて、全くの書生で、一所懸命に勉強いたして居るやうで御坐います、また、まゐりまする毎に、お父様の御恩を深く、妾にまで」

「む、彼奴は當世の若手中で、なか／＼一種の氣概と主義とを持つた男だ、随分、前

途に見込のある人間だが、惜しむらくは少々、ある一事に熱して、ある一物に傾き過ぎるやうだわい、事物に間違ひのない代り、いはゞ自己の主義に編し易くて物を容るゝ量に乏しいかと思はれる邊もある、しかし比較的まづ人物としては宜い方だらう、缺點の無い方だらう、ねエ綾、和女は何と考へるな、腹臆なく言つて見るが宜い」

「ほ、ほ、ほ、妾に、お父様、人物なぞといふ、むづかしい事の見える筈は御坐いませんが、もしあの倉橋さんのやうな人に、相應の地位と財産が御坐いますれば、どうか斯うか、お父様の御意に召すかと存じまして」

「いや乃公よりも和女の料簡を聞くのだ、今もいふ通り地位と財産とは人に依つて生ずる別問題として、まづ倉橋の人間が和女の氣に入るか、どうかといふのさ」

「いえ妾は、お父様さへ宜からうと仰しやれば」

「別に乃公は倉橋を殊更に宜いともいはないが、暫く使つて見て、その人物も知つて居るのみならず、一朝あの官を抛つて三年讀書の一寒生となつたところが少々、面白いかと思ふのさ、また彼新聞紙上で突然あんな意外の迷惑を蒙りながら、さらに平然として耳目の一端も動かさなかつた持重の態度は、當世の若手連中に多く得難いかと思はれるのさ、ところでもし和女にさへ異存なくば一應、倉橋を呼んだ上でねエ綾、それとはなしに彼が意中を聞いて見ようかと考へて居るがな、しかし彼奴妙な男で、官を罷めてからは一切あの園遊會後さらに來ないものを、わざ／＼招いで此方から言ひ出すも變なもので、また彼奴どういふ返事をするか分らないからねエ」

「しかし、お父様が直接お招きになれば、まるらない事は御坐いますまい、きつと、伺ひませうと存じます」

「む、それでは兎も角も呼んで見よう、呼んだ上で、なほ彼が目的その他の事を委しく聞き取つた後、もし乃公が善いと認めた以上は和女に異存なからうね、人間大切の事だから念を押して置くのだ」

「決して妾に、お父様さへ思召に叶へば、どう致して、妾に異存が御坐いませう」

「それでは五六日のうち、都合の宜い時を見て、は、は、は、實はね、近來、諸方よりの申込中、乃公と同等の地位あるもの、子息で、一二軒から強ての所望もあるがね、既に出來上つた父の後を保たんとする男より、むしろ譽めていへば草莽の遺器ともいふべき倉橋の如き奴を引き上げた方が面白いのみか、時勢にも適し世間へ對しても、第一は本人の和女が身に取つても行末のために善からうと考へるのさ、あの倉橋を如何に見下しても、世に出れば必ず相應の地位を得て、また一家を安全に支持する事の出來ない男で無いから、却つて將來に失ふの恐れあるものよりは確乎だら

う、とにかく和女にさへ異存がなければ乃公に任して置くが宜い」

「たゞ萬事お父様に、妾には、決して」

「よし、時に倉橋は、たしか三十五だつたな」

「さやうで御坐いますか、その邊は」

「いや三十五だつたよ、しかし三十五の今日まで、當世の若手に似合はず、よく品行を保つて居つたばかりか、今後なほ暫く獨身で以て更に大に書を讀まうといふ志節まづ珍しい男だ、たとひ多少の缺點があるにしても面白い男だ、すでに官を捨てた後の彼、よし其主義と目的とが乃公の意に満たなくつても、和女の良人として其目的と主義の差支ないかぎりには、やはり彼は彼としての人物たるを失はざる道理だからね」

「勿體ない、それほどまでの思召を承りました上は、お父様、もう妾は何も申し上

ける事は御坐いませんから」

「は、は、は、よし、子のために生涯の幸福を祈る父だから安心して居れ」

おもひに餘りて送りし文も指環も、其まゝ戀しき人の手に宿りて我心の通ぜしのみか父が言葉にも其人こそと思ひ給へる嬉しさに、今は霽れたる空に月みる心地して、胸にかゝれる雲もなし、

たとひ我を生み給ひし父の仰せなりとて、我身の生涯を託すべき品定めには、世間なみくの教育をうけし二十歳の今、よしや一時の御意に反くとも末長き一家の幸福を祈らんと、宛ら名を得たる弓取の剛弓を絞るが如く、こゝぞ一期の大事と張り結めし氣も心も、さては、これかとばかり其的を鼻梁の前に突き付けられて射るべき箭もななく、あまりの嬉しさに夢うつゝ、たゞ差俯いて俄に恥づかしく、今更ながら斯くまで深

き親の慈悲かと涙さしぐみぬ、さても其夜の人なき間に何をか思ひし、心や勇み胸や躍りて寝られぬまゝの終夜、をりしも降り出でし雨の音に誘はれて、憎や我を弄ぶかと思はす夜具の袖に隠れしが、身に餘る嬉しさの夢心地を眼前、曉までの枕と共に語りしか、やうく雨も已みて幽に軒端を渡る風さへも、戀や無常を我には吹き送らじと微笑みつゝ、起き出でし朝ほらけの美容は名筆の畫も及ばず、これや文士のいふなる美の神の化身かと疑はれぬ、

圓滿なる戀は瀕死の人にも生命を與へ、眞實なき戀は智徳の人の生命をも奪ふ、しかも心に遂けて身に遂げざる戀の一瞬は百年の娛樂に優り、身に遂けて後の心に遂げざる戀の百年は一瞬の娛樂に劣る、
新婚の一夜前、貴賤ともに女は正にこれ愛の神なり、されど夫婦となりて後の女、い

づれか愛の神ぞ、不幸にして多く世の諺これを暴れ出す山の神ともいふ、
新婚の一夜前、賢愚ともに男は正にこれ情の宿なり、されど夫婦となりて後の男、いづれか情の宿ぞ、不幸にして多く世の諺これを雨漏る只の宿六ともいふ、
されど身は一國の大臣が令嬢として才色兩全といはれたる綾子の戀や、百年に優る一瞬の娛樂を其まゝ長く保ちて、姫御前のあられまなく山の神と呼ぶる、恐れもなかるべく、これが情の宿たる倉橋幸藏また徒らに只の宿六ならずして、あはれ友白髪の末まで戀の圓滿を伴ふべき幸福の男たるべきか、これを戀の神に問へど答へず、強ひて問へば夫婦となりて浮世に支配せらるゝ人間のあづかり知るべからざるところぞといふ、

立關の書生には令嬢の腰巾着お傍御用人といはれ、朋輩の陰言には生きて御飯をいた

「だくお嬢様の御手道具、お嫁入の時には箆笥長持に先立って行く筈のお荷物とまでいはるゝ例のお里が、他手にかけてぬ日夜一切の受持役、もはや朝の五時半お枕頭へ御用を伺ふころと、いそぐ何心なく入り来りて俄に打驚いたる顔色、

「あれまアお嬢様、どう遊ばしましたの今朝は、貴嬢まだ五時半で御坐いますよ、平常よりは一時間の餘も、お早いに、ちやんと御召物までお着替へ遊ばして、どちらへ往らッしやいますんで御坐います、また誰がまるッて、お夜具などを疊みましたか」「ほゝゝゝわたしは早く起きれば何故さう不思議だらう、一人だッて着物も着替へ夜具ぐらゐるは疊めるよ里」

「おや御免遊ばせ、さう申し上げた譯では御坐いませんが、あまり、お早いので、そして今朝は、どちらへ、もしあの根岸へでも、お越し遊ばすなら是非お伴を願ひます、過日お使者にまるッて、萬事よく勝手も存じて居りますし、第一あの方の御兄

弟同様にして在らッしやるお友達で黒田さんといふ方、實に面白い方で御坐いますよ、ほゝゝゝそれは其事として置いて、また別に和女と乃公が夫婦約束の内相談でも取極めた上、あッと倉橋を驚かしてやりたいなぞと、全く氣輕に捌けた呵しい方で御坐いますよ、ほゝゝ、是非お伴を、妾だッて貴嬢、過日お使者の時は、生憎御本人の御不在で、しみんぐお顔も拜見いたしませんから今日こそ、ねエお嬢様」

「あれ、いやな里だよ、まだ何處へ往くともいはないにさ、そして和女、戯談にも黒田さんと、そんな事を、始めて、お目にかゝッたばかりで居ながら、お慎みよ失禮な」

「いえ貴嬢、妾が申したんぢや御坐いません、黒田さんの方から」

「たとひ黒田さんが仰しやッたッて和女が悪いよ、女のくせに始めて伺ッた殿達の前で、不安心だよ和女のやうなものを使者に出すと、勝手に自分の面白いことばかり

談話して、わたしの用なにか、どうしたか分りやアしない」

「あれお嬢様、酷い事を仰しやいますこと、いくら不束な妾でも、御主人の御用を疎遠には」

「だつて和女、過日の、お返事も、指環も其まゝで、まだ」

「いえ貴嬢、お文の御返事は御坐いませすとも、あゝいふ御立派な指環を其まゝ、お返しにならないのが即ち御返事も同様で御坐いますよ、ほゝゝゝしかしお嬢様へ、いや眩ゆいの眼が悪くなるの否あれが一個あれば田舎へ歸つて田地を買つて好きな人と生涯安樂に暮すのと、家中の婢女が皆存じて居ります其の指環が急に無くなつた事を何とか變に、思ひは致しますまいか、貴嬢の事さへ申せば、お襦袢の袖口に糸屑が附いて居りまして妾を眼の敵のやうにして蒼蠅く尋ねますから」

「何だよ召使ひの癖に、入らざる事を差出がましい、和女さう言つておやり、お嬢様

へ直接に伺つて見るが宜いと、第一この事は、わたしの一料簡でない、お父様も御承知の上で在らつしやる事だから、和女だつて妙に、變に思つて、わたしを見積ると里、きかないよ」

「どう致しまして貴嬢、妾がさやうな勿體ない、たゞ一日も早く、思召し通りになりますます事を蔭ながら、お祈り申し上げて居りますくらゐで」

「それでも和女、始めて、わたしがあの方の事を談した時、いやに澄まして四角ばつた手織木綿の何とか斯とか、悪く言つたでないか」

「まアお嬢様の執念深う仰しやること、あの園遊會の時はまだ何も妾が存じませンもの、たゞ御風俗を申したばかりで、ほゝゝゝ御免遊ばせ、萬事この里が悪う御坐いましたから、きつと以後は心得ます、ほゝゝゝ」

「さう何も別に更めて謝るには及はないよ、また和女、謝るなら笑はずに謝るもん

だよ

「あれまア、どう致したら宜しう御坐いますか、大變に今朝は御機嫌のお悪いこと、何か里に、不調法でも御坐いましたか知らん、いえ眼の覺めましたのは五時前で御坐いますが、やはり平生の時間に、お起き遊ばす事と存じまして、つい貴嬢、御免遊ばせ」

「ほ、ほ、ほ、呵しい里だよ、いちく謝ッてばかり居るよ、和女の御免遊ばせは欠伸と同じで、いつも長談話のうちには絶えず自然に出るんだね、まるで龜の子の居る池の水の泡沫のやうだよ、ほ、ほ、ほ、」

「あらお嬢様、御機嫌がお悪いかと思ひの外、何か今朝は、お嬉しい事があッてお喜びの自烈ッたさに、この里が貴嬢お戯弄ひ遊ばすんで御坐いますね、道理で今朝は」

「道理で今朝は、どうしたの」

「御免遊ばせ」

「あれまた御免遊ばせを出すよ」

「ほ、ほ、ほ、だッて貴嬢、召使ひが御主人に對ッて、何か申し上げる毎に、いちく、

謝ッてさへ居れば間違ひが御坐いませンもの」

「それ和女は直接さういふ大膽な氣で居るから、わたしを何とも思はないんだよ」

「あ、申せば斯う、かう申し上げればあ、と貴嬢、この里が全體どう致せば御意に召しますの、どう御返事を致せば御氣に入りますか、さッぱり分りませンから思召し通り、さアお嬢様、ほ、ほ、ほ、お指圖次第で死ねと仰しやれば死んで御覽に入れませよ」

「さうだよ、わたしを困らせれば和女の氣が濟むんだから、何とでも言ふが宜いよ、

雪には宮殿も藁屋も同じ眞白さ、戀には智者も賢者も愚者も貧者もなく同じ愛情の下等、おもひのまゝの春に逢はゞ身も骨も溶けて流れる水に等しとぞいふ、まして女は平生の要害深く胸裡に忍んで色にも穂にも出でざれど、人知れぬ閨のうち月さへ窺はぬ枕の邊り、さては心を許せし深窓の下に打解けては、さすがに取亂して我ながら愚に返りつゝ、これぞ情の眞實やまと種の蔓に咲きし花一輪の風に吹かるゝが如く、葉末に彩りし歐洲的の理窟めいたる學問も教育も三文の價値なし、

其四

ふしぎに同年同月の出生ながら、たゞ日數に僅の相違ありて倉橋より七日以前この世に出でしがため、汐入村の昔も今も兄分として立てらるゝのみか、由來の識見度量また一日の長ありとて萬事の兄分にせられたる川上三吉、されば今日このごろ倉橋が生

涯の幸不幸を自己の一身に引き受けて人知れぬ心を碎きつゝ、いはゞ戀の參謀となり心の幃幄に參じて沈思黙考の末、あはれ貧にして學に深く身は孤獨にして志の遠大なる友のため、聊か其間に策を施すが如きも願はくは戀の神よ、この目的をして手段を辯解せしめよ、おのれやれ五萬金に代へて根岸の奥の草の庵を歐羅巴の中央に移しつゝ、世界の檜舞臺を踏ましめんと、ならば傑物に等しき一快事、ならずば小人に似たるの結果、刎頸の友をして最後の大物たらしむるも眼前の小人たらしむるも、一瞬の吉凶は我三寸の舌端にかゝりて彼が生涯の禍福また茲にありと、さながら其身の死活問題に逢ひしが如く腸を絞つて日夜の腦を悩しぬ、

今こそ餘所に思へど戀や戀、誰が上にもあることか、我も昔は情の露に濡れて生涯の禍福と吉凶を判ぜし身の、こゝにまた繰り返して友のために同じ心を碎くかと、何と

やら今昔の感に堪へず戀や戀、

夜更け人定まりて後、はや寢床を敷き並べながら其間の枕頭に火鉢を引き寄せて差對ひつゝ、互に打解けて語る夫婦の心に紙一枚の隔意もなく、おそろしき浮世の風さへ通ひ來て吹き分くる寸隙もなし、

「ねエ芳、もう夜も更けたから寢て話さうと思つたがね、寢物語りぢやア石佛に對うて談判するやうなもんだから、今、暫くだ、起きて居てくれ、あすの朝寢は少々ばかり黙許するからね、はゝゝゝ」

「あれ良人、いくら妾が寢坊だつて石佛は酷う御坐いますね、御用があれば此まゝ夜明しでも致しますが良人こそ怪しいもんですよ、ほゝゝゝ」

「なアに乃公が怪しいもンか、前夜も和女、つい向河岸の本所の火事で、あれほど喧しい三點鐘でさへ、ぐうぐう寢込んで起きなかつたぢやアないか、はゝゝゝしか

し、そりやア兎も角、今夜はね、和女に折入つて頼みがあるのさ、つまり生涯に一度といふ大役を首尾よく仕遂けて貰ひたいんだが」

「おやまア良人、唐突に大變な事、妾にですか、どんな事か存じませんが生涯に一度といふやうな大役が、どうして妾のやうなもんに」

「いや和女に限るんだ、實はね、倉橋の一身上に就いてさ」

「猶更ら御免を蒙ります、もし良人の事では是非とも妾に限ると仰しやれば、いくら不束でも一所懸命になつて見ませうが、倉橋さんの事を妾が、どうせ満足に出来る筈が無いんですもの、最初から判然と、お謝絶して戴きたう御坐いますワ」

「なるほど一應は道理だがね、こりやア倉橋が直接、和女に頼む理由でなく、乃公が倉橋から引き受けて和女に頼むのさ、簡単にいへば戀の取持で、いはゆる愛情の橋渡しさ、しかし上田と清の媒介をしたのとは違つて、その兩方の岸が聊か高いため橋

の渡し工合に少々面倒な事があるんだよ」

「おや、そんな事で御坐いますか、あんまり良人が更まつて大層なやうに仰しやるから、實は驚愕いたしましたよ、ほ、ほ、ほ、お目出たい事、倉橋さんが、まアどういふ女を」

「それが和女、縁といふものは妙なものね、そら一時あの新聞紙上で飛んでも無い無根の冤を捏造せられて倉橋が大變に迷惑をした相手の本尊、いはゆる大臣の令嬢さ、それが和女、世間へ對して口惜し紛れの意地から出たものか、但しは嘘から出た眞實といふものか、兎も角、今は新聞に唄はれた反對の事實が持ち上つて、いよいよ倉橋に惚れ込んで仕舞つたのさ」

「おやまア、さうで御坐いますか、しかし倉橋さんは、お幸福な方、嘸お嬉しいでせうね、早く其お嬢様を見たいこと、今年お幾歳」

「二十歳ださうだ、しかも才色兩全の名聞があつて、なかく美だといふこつた、ところだね、また父の大臣が確乎に承知したかしないか其邊は分らないが、新聞の當時わざ／＼倉橋を招いて園遊會を催し、また其後しばらく本人が公然と馬車を驅つて根岸へ襲うた事實から考へると、どうやら内心に娘の意を汲んで黙許してるやうだ、のみならず、現に過日は、思ひに堪へ兼ねた本人から倉橋に對うて直接乞ふが如く促すが如き一片の艶書が來てね、それに小豆粒ほどのダイヤモンドを粧飾した立派な指環が添へてあるのさ、つまり西洋風に婚を求めて愛を運ぶ後日の證左だね」

「あら倉橋さんは急に大した色男、お目にかゝつて御祝儀かたぐ、さんざ苛めて上げねばなりませんね、ほ、ほ、ほ、」

「しかし、この色男なかくの變物でね、嫌だといふんだよ、あんな女を欲しくない